

Yu Arisawa

有澤有



なのたる



帝国の勇者

——世界より少女を守りたい、と“まがいもの”は叫んだ——

試読版

プロローグ

大陸に、その守護者たる勇者が現れなくなり300年。
大地が汚^けれていくなか――。

大陸の北と西に広い領土を治める、ベルカ帝国。東の
アスガルズ共和国、南の七星^{しちせい}連邦は、睨^{にら}み合いながら自
らの領土を拡大せんと画策^はしていた。

3つの大国が覇^はを争う時代、戦乱に巻き込まれる小さな
国々があつた。

ハルダート王国もその1つ――。ハルダートは、半

年前にベルカ帝国と開戦。軍事力の絶望的な差に、すぐに大敗を喫する。

この窮地にハルダートの民は、救国の勇者をこい願ったが、その祈りは届かなかった。

いまの時代に勇者は、ただ一つの勢力にしか存在しない。

ベルカ帝国の勇者たち。

人々は、強大な力を持つ彼らを“帝国の勇者”と呼び、それぞれに敬意と憎悪を抱いた。

それが、人工的に作られた“まがいもの”の勇者であるとも知らずに――。

一章 うつろう刃

——〈勇者殺し〉はどこだ。

鉄の輪でしかないライフルの照準器しょうじゆんきを覗のぞき込み、カイクムが心の中でつぶやく。

草色の野戦服を着込んだ敵たちの姿を視線でなぞる。

敵を撃つ。敵が膝ひざから倒れる。——こいつじゃない。

敵を撃つ。敵が地面すべを滑るように力なく崩れる。——こ

いつでもない。

敵を撃つ。敵が強装弾きょうそうだんの威力のままに岩に打ち付けら

れる。——こんな程度じゃないだろ。

——〈勇者殺し〉はどこだ、どこにいる。

ハルダート王国の小さな丘に囲まれた"誰^{だれ}か"を祀^{まつ}っていた石造りの寺院。

その門前で帝国軍の戦車と二両の装甲車が立ち往生^{おうじよう}している。

丘の稜^{りよう}線^{せん}を使^{つか}って身を隠しながら進撃する敵、ハルダート残党軍。残党軍は街道を移動していた帝国軍の部隊を奇襲したが、これを防がれ最後の突撃を喰^くっていた。

「近づけません!!」

カィムを狙^{ねら}っていた残党軍の兵士が、岩陰に隠れながら悲鳴を上げた。眼前で仲間が撃たれたのだ。岩陰か

ら突撃をするために、わずかに飛び出した肩を撃ち抜かれ、バランスを崩して倒れると冷徹に心臓を撃ち抜かれた。その無残な光景に突撃の氣勢を削がれてしまう。「なんて正確な射撃だ。スナイパーなのか、いや……」兵士が倒れた仲間を一度見てから、岩陰から射手の姿を覗き見る。

「……子供じゃないか」

兵士の視線の先には、赤茶色の大型装甲車の屋根からライフルを膝射するカイムの姿。

黒い髪。黒い軍服。鮮烈な翠玉色の瞳は鋭い殺気を帯びている。まるで黒い豹にでも睨まれていようだと背筋が凍った。

「おい、よせ！」不安にかられた別の兵士が、覗き見て
いる兵士のベルトを引っ張った。

だが、ベルトを引っ張った兵士が、すぐに目を^{みは}瞠る。
覗き見ていた兵士の体が、ベルトを引っ張る力に負けて、
力なく地面に倒れ伏した。

「そんな……」

覗き見ていた兵士は眉間^{みけん}が撃ち抜かれていた。

「くっ、帝国の、勇者め——」

「セエレ、ミーナ、へ勇者殺しへはいたか？」

カイムがライフルに新たな弾薬を装填^{そうてん}しながら、首に
巻いた^{せいたい}声帯マイク越しに仲間^{せいたい}に問う。

《見てないよ、ていうか顔とか分からないじゃんよ》と少年の声。

《こっちもそれらしいのはいないよ、カイ》と少女の声。
《戦鬪に集中しろ、カイム！》と女の叱責^{しっせき}。

仲間たちの応答。次いでカイムの横で、味方の戦車からズドンと榴弾^{りゅうだん}が発射される。榴弾は西の丘の中腹を敵部隊ごとえぐり取った。戦車砲が起こした発射の衝撃波に耐えながらカイムが瞳を細める。奥歯を噛^かみしめ。
《勇者殺し》……心の奥底でその名を呪^{のろ}う。

カイムから見て左前方に100メートルの位置。
戦場を回り込むようにセエレ・ハーディが猛然^{もうぜん}と駆け

ている。

腕にはブレイヴオーダー社が制式採用しているジークフリート・ライフルB〇カスタム。ライフルの先端には長めの銃剣じゅうけんを着剣。

正面からはセエレの疾走しっそうを阻止そしする迎撃。幾重いくえもの音速の火線。構わずすべての攻撃を体で弾はじいて、受け止めて、反そらして、走る。

「く、来るな！」

セエレを狙った兵士の1人が、弾丸だんがんを受け付けけない相手に恐怖の声をあげた。

「行つくよおお!!」

セエレが掛け声をあげ一気に跳躍ちようやくする。銃撃をものと

もせず敵部隊のど真ん中に降り立つ。

兵士たちが自分たちの中心に舞い降りたセエレに狙いをつけて――躊躇^{ためら}う。たった1人の敵を環状に囲んでいる。これで撃てば同士討ちになりかねない。

「もらったよ!!」

セエレは自分を囲む兵士たちを次々と的確に銃撃する。
ダン、ダン、ダン、ダン!!

右腕。左足。右腿^{もも}。右肩……撃ち抜かれた兵士たちが地面に倒れていく。

左足を撃たれた兵士が、痛みに耐えながらライフルを構える。

「それで倒れてな、って!」セエレが銃剣でライフルを

叩^{たた}き落とし、兵士を蹴^けり倒した。

「くそ……弾丸をものもしないなんて……まさか、お前は……」

右肩を撃ち抜かれた兵士がライフルを取りこぼし、息を吐きながら、悔^{くや}しそうに顔を歪^{ゆが}める。

「そ、帝国の勇者セエレ。セエレ・ハーディ！」

カイムの一つ下の15歳。柔^{やわ}らかく伸びる髪の毛。くりとした大きな瞳。前を開けた軍用ジャンパー。わざとらしくジークフリート・ライフルを肩に担^{かつ}ぐ。まるで主人に褒^ほめられるのを待つ犬のように誇らしく胸を張る。

「セエレって、あの【リビングメタル】か……」

「あれ、やっぱ分かるの？ 僕も有名になつたなあ。そ

ういえば、この前の勇者の人気投票では、30位台にランキングが上っていたからかなあ、僕も有名人か、そっかあ！」

セエレはちよつと照れくさくて鼻を撫^なでる。

敵兵がニヤリと口角^{こうかく}を上げて無線を搦^{つか}んだ。

「徹甲弾^{てつこうだん}だ！ 人だと思うな、徹甲弾を使え!!」

「……あれ……あれ？」

喜色^{きしよくまんめん}満面だったセエレの顔がみるみる青ざめる。

《助けてよ、カイ！ アイツら、人に向かつて徹甲弾を使ってくるよ、僕には特効^{とっこう}だよ!》

無線越しの悲鳴。敵から逆走したセエレが、息を切ら

せながら助けを呼ぶ。

《徹甲弾を撃つてきたのか》カイクが感情を込めずに応答する。

《ああ、そうだよ。だって使うって言ってたもん!! イエローアダマント合金ごうきんに置換ちかんした僕の筋肉は普通の弾は防げるけど、徹甲弾だと普通に抜かれちゃうんだよ!!》
勇者セイレ。身長162センチ、体重95キロ、痩せ型、
という特殊な体軀たいくをしている。

骨と筋肉の一部を、金属と金属繊維に置換しているためだ。華奢きゃしゃな見た目に反して重い。

通常の弾丸に対してセイレは無敵の防御力を誇る。強固な骨格と筋肉が、弾丸の肉体への侵入を拒む。そう、

その強固な体は徹甲弾には弱い。

徹甲弾は、堅牢けんろうな装甲や魔物の鱗うろこを貫くために使われる、貫通力に優れた弾丸だ。生身の人間相手に使うことはあまりないが、この残党軍はセエレに向かつて徹甲弾を使ってきた。

《ふん、情報が漏れているのかもな》

《カイってば他人事ひとごとみたいに！》

《通常の弾丸でもダメージを受ける俺たちよりはマシだろう》

《……でも、撃たれたら!! ……痛いだろうしい!!》

セエレは自分が徹甲弾で撃たれた姿を想像して蒼白そうはく。その防御力によって外科手術での治療が困難なこともセ

エレの恐怖を増幅させているのだ。

《戦わないと追い込まれるだけだぞ。反撃しろ、セエ
レ》

《うう、分かったよお》

《もう少しだ……すでに襲撃部隊の本隊は撃退した。あ
とは、散発的に向かってくる敵を俺が押し留め、後方の
部隊にお前が回り込むんだ。それに合わせて俺も前進し
て、十字砲火^{じゅうじほう}で攻撃、襲撃部隊を殲滅^{せんめつ}する》

《カイ！ お姫様が休戦するって言っているのに、アイ
ツらはなんで攻撃してくるんだよ！》

《残党軍だ。ハルダート王宮は停戦を命じている。従^{したが}わ
ない彼らはテロリストに過ぎない。……だが、襲撃犯の

正体なんて戦闘後に考えればいい。敵に押し込まれるぞ、対応しろ！」

「っ、このっ！」

必要に迫られて、逃走していたセイレが反転する。ヒュンと顔の横を徹甲弾が横切った。「ああ、神さま！」心の中で漠然^{ばくぜん}とした神様に祈る。

身^{かが}を屈めながら走るセイレ。向かってきた敵にライフルを連射した。

薄汚れた草色の野戦服を着た敵兵が「撃たれた！」と反射的に目をつぶる。だがセイレの放った弾丸は敵兵の体を貫通することはなかった。着弾の寸前で、弾丸は丸まった糸玉を解く^{ほど}ように、一本のワイヤーに高速で変

化した。ワイヤーの先端には分銅^{ぶんどう}が取り付いており、敵兵の足に回転しながら巻き付く。

セエレの能力へアダマンアダプトく金属を操作する――その真骨頂^{しんこつちよう}。

「なんだ！」

ワイヤーに足をとられ地面に倒れた敵兵が、状況を飲み込めず驚愕。次いでセエレによつて右手を精確に撃ち抜かれ悲鳴を上げた。

これで武器は使えまい。セエレが小さく笑みを作る。「生き残つて、この【リビングメタル】セエレの勇姿^{ゆうし}を後世に伝えるがいいよ！」

「【リビングメタル】が反転したぞ、応戦しろ！」

さらに続く敵兵が叫^{さけ}んだ。続けざまに激しい火線の乱れ撃ちがセイレに向かつて殺到する。

「ああ徹甲弾はやめてえー！ー！！」

《カイ、3時の方向から増援。数は9。うち2は対戦車装備……どうしよ？》

カイムの無線が透き通るようなミーナの声を受信する。

《迂^{うかい}回する敵の処理はお前の役目だ。できるな、ミーナ？》カイムが短く返答。

《うん、見つからないからへブリッツヘックスくでー気にやるよ》

丘の中腹で敵の動向を探っていたミーナはそう言つと

立ち上がった。

ミーナ・マリール。勇者。17歳。少女。

カイクと同じ、ベルカ旧騎兵隊の制服を元にするブレ
イヴオーダー社の漆黒しゅくこくの制服。肩に羽織はおった短いケープ。
ラインの入ったミニスカート。革かわのロングブーツ。

空色の瞳。エアリーロングにセットされた豊かなブロ
ンド。去年度の「同じ部隊にいたら士気があがる帝国勇
者ランキング」女性部門第5位「のまるで深窓しんそうの令嬢れいじょうの
ような戦場には不釣り合いな美貌びぼう」。

右手の人差し指を桃色の唇くちびるで咥え、装着している特殊
繊維の手袋をそのまま取り外す。ライフルを構え、丘の
麓ふもとを進軍する敵の増援に狙いを定める。

《わたしの活躍を見ててね、カイ！》

《無茶を言うな、視界の外だ》

ミーナのライフル。そのチャンバーから青い光が迸る。ほとばし
バチバチと破裂音。連続して4射。青い稲妻を纏まとった弾丸が敵に殺到する。

対戦車装備の敵を最優先して4人に着弾。残党軍の兵士たちが絶叫を上げて倒れた。

ミーナの攻撃に気づいた残りの敵兵が、三々五々さんさんごごに散りながら応射。同時に残党軍の兵士の1人が手を振って味方に指示を送った。

「そうらい蒼雷の勇者」だ!!　へマナ、へマナを使わせるんだ!　へマナが切れれば勇者といえど能力が使えな

くなる。攻撃を引き付けてやり過ぎすんだっ!!」

岩陰に隠れる者。傾斜を利用する者。必死に走る者。ミーナの攻撃を警戒しての行動だ。

どんな生物も、内包するカロリーからへまなぐという魔導的エネルギーを作り出せる。へまなぐは剣と魔法の時代の魔術や、聖人の奇跡の原動力に使われていた。

帝国の勇者の能力へオラクルも、へまなぐをエネルギーに発揮されている力だ。

へまなぐが尽きれば、ミーナもその力が使えなくなる。

「対応は間違っていないけど……甘いよ」

敵兵の応射が側そばの地面に着弾しても、ミーナは瞬きまばた一

つもしない。

そのままミーナがライフルで冷徹に銃撃する。青い閃光^{せんこう}が空気を切り裂きながら、岩陰に隠れた敵兵の側を通る。バチバチと破裂音。稻妻の残滓^{ざんし}が空間をかき混ぜるように暴れる。

岩陰に隠れていた兵士が絶叫しながら、□の端^{はし}から泡を吹いて仰向けに倒れた。

「直撃なんかしていない！ 青い光に触れるだけでこうなるのか!!」

傾斜に伏せていた兵士が瞠目^{どうもく}する。

「わたしの発電器官は今日も絶好調だね」

ミーナ・マリール。海の殺戮者^{さつりく}サンダーサーペントの発電器官をその身に宿す勇者の少女。

発電器官から発生した電流を操る能力はへブリッツヘックスと名付けられていた。

ミーナはへブリッツヘックスで発生させた電流を、電撃弾という特殊な樹脂じゆしでコーティングされた弾薬に溜め込むことで、稲妻を纏った弾丸を発射することができ
る。

残りの敵を電撃弾で狙い撃つ。直撃でなくてもよい。
掠かすめただけで倒すことができる。

「いやだ！」「に、逃げろ！」「うああああ！」

ヨシと心の中でガッツポーズ。ミーナにとって、それはとても容易たやすいことだった。

《カイク、準備はいいな》

帝国側の指揮官であるノーブル大尉^{たいい}の言葉に《了解》とカイクは短く返事をする。ついで仲間の状況を判断して、声帯マイクに言葉を投げる。

《セイレ、ミーナ。準備はいいな？ ——仕上げだ》

「クソ！　こうまで押し返されるなんて!!」

寺院から南に300メートルの位置で、襲撃部隊の指揮官の男が悔しさに奥歯を噛みしめた。「このままでは敵に損害を与えられずに全滅だぞ！　帝国軍だって勇者以外の通常の歩兵を展開しているのに、勇者に邪魔されて、歩兵1人にすら攻撃できていない!!」

いくら相手が勇者だからといつても、こんな無様な事態を許すわけにはいかなかった。

「クソッ!! —— こうなつたら装甲車の上にいる勇者を集中して狙え!! 情報通りなら異名いみょうもないような雑魚ざごのハズだ!!」

指揮官が、自分の周りに立つ火器を持った20名の部下たちに命令する。どうしても一矢報いつしむくいたかつた。

帝国の勇者には異名がある。その功績や「オラクル」の能力によつて味方や、あるいは敵が名付けるのだ。帝国の勇者たちが所属する民間軍事会社ブレイヴオーダーのプロモーションの面が強いが、実力がなければ異名はつかない。つまりあの黒髪の勇者は【蒼雷の勇者】や

【リビングメタル】より下^{くだ}しやすいハズだった。

「黒髪^{くろかみ}の奴^{やつ}が消えました!!」

^{そうがんきよう}

双眼鏡を覗き込んでいた兵士が悲鳴を上げるように叫ぶ。監視していたカイムの姿が一瞬で視界からかき消えたのだ。覗くレンズの向こう側には誰もいない装甲車の屋根と、キラキラと輝く火の粉のようなものが見えていた。ただだった。

「なんだと、どういことだっ!？」

指揮官が叱責するように怒^ど鳴^なった直後。

ドオオン、と大きな音を立てて、指揮官を囲む部隊の真横で3メートル以上の土煙が上がった。もうもうと立つ埃臭^{ほこいぐさ}い土煙のもとへ、恐る恐る2人の残党軍の兵士が

ライフルを構えながら、近づく。その様子を見ながら指揮官が「まさか」と顔を青ざめる。

「う、撃て、構わん、あの土煙に向かって——」

指揮官が指示を出した瞬間、カイクが土煙の尾を引きながら飛び出す。

即座に、指揮官の横で警戒していた兵士3人を銃撃。近づいてきていた2人の兵士が応射しようとするや、ライフルを槍やりのように持ち直し1人を銃剣で斬きり払い、もう1人の胸を貫いた。

「応戦しろ!!」

指揮官が激げきを飛ばす。だが、同時にまた部下が撃たれた。今度は別方向からの攻撃。

「もう罅んでいるよ！ 観念して投降しなつて!!」

敵部隊の側面に回り込み銃撃を開始したセイレ。無駄死にしないで。そのつもりで叫んだ。

「【リビングメタル】か！ くっ、せめて黒髪の奴だけで構わん、殺せ!!」

指揮官の怒声^{どせい}が耳に入り、カイルが敵兵を捌き^{さば}ながら指揮官を横目に捉^{とら}えた。

「へ勇者殺しはどーだ!! 答えろ!!」

「知っていたって教えるものかよ!!」

指揮官がライフルを構える。照準の先で、カイルが高速で残党軍の部隊の中を駆け抜けている。部下たちが斬り倒され、撃ち抜かれて、殴り飛ばされても、指揮官の

男は照準で狙いをつけようと務めた。焦^{あせ}りで頬^ほから顎^{あご}に汗^{したた}が滴^たつていく。

部下がまた1人斬り倒される。……構わない。せめて一人でも道連れを作らなければ意味がない、そう指揮官は考えている。……すると、カイムのライフルから"キーンツ"と音を立てて、空になったクリップ——ライフ^{はいしゅつ}ルに弾薬を装填^{そうてん}する器具——が排出^{はいしゅつ}される。8発の残弾が尽^つきた合図だ。その一瞬、指揮官にはカイムの動きが止まったように見えた。

しめた。歪んだ笑みが溢^{あふ}れる。

指揮官はしっかりとカイムの胸に照準をつけて、引き金を引き絞る。

「ははッ！ もらったぞ、帝国の勇者め!!」
決死の一撃が放たれた。弾丸が、カイムの胸に吸い込まれるように迫る。

同時。カイムが、自分を狙う殺気に呼応するようにライフルを振り上げた。カイムの胸のあたりで、バチッ、と火花が散る。指揮官の男にはカイムの右目が一瞬だけ輝いたように見えた。

「えっ？」

指揮官が呆然^{ぼうぜん}としながらライフルの照準から顔を離す。背筋がブルツと震えた。

「……弾丸を……銃剣で斬ったのか？」
カイムの後方の地面。2箇所で穴が空いていた。2つ

に割れた弾丸が着弾したのだ。

「は、話が違うじゃないか……」

指揮官が腕の力を失いながらライフルを下ろす。雑魚のはずだろ。現実を疑う。

なおも果敢^{かかん}に抵抗する残党軍の兵士たち。カイムが弾丸を斬った一瞬のことなど知る由もない。必死にカイムの隙^{すき}を狙う。

カイムは銃撃を躲^{かわ}し、リロードしたライフルを連射、苛^{かれつ}烈に叫ぶ。

「へ勇者殺し〜を出せ!!」

指揮官の男が、目を伏せながら、両手を上げた――。



…
…
10日前

「はい、そこ左。あ、もうちよい右かな」

帝都^{ていと}に居^{きよ}を構えるブレイヴオーダー本社。広い敷地の

北端に位置する第一研究所。錬金術師^{れんきんじゅつし}ロイド・メルキオ

ラが局長を務める薬品と大型水槽^{すいそう}に溢れた研究所には3

人の人間がいた。

「はい、カイクン。今度は、そこに置いてね」

1人はロイド・メルキオラ局長。ボサボサの髪と丸メ

ガネ。ゆつたりとしたローブを着込んだ怪しい風体^{ふうてい}。年

齢不詳の若々しい顔。いまはニコニコと笑みを絶^たやさず

指示を飛ばす。

「これでいいのかメルキオラ。……くっ、流石さすがに重いな、この水槽」

1人はカイク・ミラー。

ブレイヴオーダー社に決められた髪型。翠玉色の瞳はわずかに左右で色が違う。歳よりも大人びた顔つき。その印象を増幅しているブレない姿勢と、品格ひんかくのある勇者用の黒い制服。

いまはメルキオラの指示に従って、自分より大きな円筒状の水槽を抱きつくように持ち上げて移動させていた。その重荷を床に置いて、苦しそうにふーっと息を吐く。「ちよつと、メルキオラさん！ 聞いていますか？ こ

ういうのやめてくださいつて、いつも言っているじゃないですか!!」

1人はアリサ・テレザ。濃い栗色こくりの髪を首筋で結つたポニーテールの24歳の女。スーツを纏そうかつう元軍人。ブレイヴオーダー社の60名あまりの勇者を総括するチーフマネージャー。

「カイクン、こっちの水槽も端に寄せちゃつてよ」

「……これ、何が入っているんだ?……なにかの腕か?」

カイクンがニメートルはある水槽の中身を覗き見る。ピンク色の液体で満たされた水槽の中には禍々まがまがしい大きなシルエツトが浮いていた。

「ああ、ガーゴイルの腕だよ。筋繊維と骨格の研究をし

ていたけど、あんまり役に立ちそうもなくてね。素材を
役立てられないなんて錬金術師の名折れだよ」

そう言ってメルキオラが笑う。肩が揺れるたびにメガ
ネが光を反射した。

「だから、ちよつと聞いているんですか、メルキオラさ
ん!!」

必死な形相で^{ぎょつそつ}アリサがメルキオラに詰め寄る。

「……聞いてますよ、アリサさん。別にいいじゃないで
すか、バイト代も出すし」

「ダメですよ！ カイムくんの力は、帝国専属の民間軍
事会社であるうちの大事な戦力なんですから、こんな
^{あなた}貴方の気分転換の模様替えごときに使わないでください

!!」

「でもカイクくんも休日だっというしー」

「いうしー、じゃないですよ。休みなんだから、休むのが仕事なんですよ。あんなことがあつたばかりなんですよ!! ——カイクくんも水槽を持ち上げてないで、やめなさい!!」

「ッ——どいてくれアリサさん!」

カイクが自分の進路にいたアリサに警告した。体をしならせて苦しそうに水槽を運ぶ。

「ああ、ごめんね」

そうアリサに譲られた道を、カイクが水槽を引きずりそうになりながら歩む。

「いったい何キロあるの、その水槽？」重そうねとアリサが尋ねる。

「200キロって聞いた。——っ」と

カイムが水槽を指定の場所にドスンと置きながら答えた。アリサが目を丸くする。だが——。

「それは保存液が入っているからその倍以上だね」メルキオラが涼^{すず}しげに補足した。

「どうりで重いわけだ」

「落としたら危ないでしょう、1人でやるんじゃないの!!」

「まあアリサさん。1人で十分なんだからいいじゃないですか」

「まったく、自分が勇者に改造した子を、まるで実の子にお手伝いを頼むみたいに使うのはやめてください。これは60名あまりの帝国の勇者たちのマネージャーとしての警告です」

アリサがビシツと言う。

するとメルキオラが肩を揺らして愉快ゆかいそうにする。反省はしていないようだ。

「アリサさんは元気ですねえ。……おっと。はい、カイムくん。バイト代だよ」

メルキオラが懐ふところから書簡しょかんを取り出してカイムに渡した。

「すまない」カイムが軽い手付きで受け取る。

アリサがまた目を丸くした。心臓が跳ね上がり、「そ

れって」と書簡を指差す。

「こ、こ、こ、こ、こ、皇帝陛下の書簡じゃないですか！」

書簡のシーリングスタンプでアリサがそう理解する。翼^{つばさ}を持つ金獅子^{きんじし}のデザインだった。

ベルカ帝国人にとってはベルカ皇帝の命令は神の啓示^{けいじ}に等しい。それがいまここに降臨した。

そんな大切な書簡をカイムが粗雑^{そざつ}に開封。中身を取り出し広げた。

なにになにと、アリサがカイムのうしろに立って、書類を覗き見る。

「えーと……勇者カイム・ミラーは1週間後に実地され

るハルダートでの極秘任務への参加を命ず。また同作戦において「勇者殺し」とされる対象が現れた場合は、これを駆逐^{くちく}せよ。……「勇者殺し」って、あのハルダートでうちの子たちを3人も殺した」

「ああ、そうです」メルキオラが応える。

「この任務は「勇者殺し」が出現した任務と同レベルの重要度の高い任務だからね。「勇者殺し」がまた出るかもって危^き惧^ぐされているね」

「望むところだ」

カイムが長く息を吐く。その目つきが望む敵の姿を想像して鋭くなる。

「だ、ダメよ。よりにもよって君が「勇者殺し」と戦う

なんて……冷静でいられるわけない。だってこれは君にとって“家族”の——」

そのさきの言葉がタブーであると認識しているアリサが口を慌^{あわ}てて噤^{つぶ}む。

「そうだ、シオンの仇^{かたき}を討つ」

カイムが命令書を置きながら言い放つ。

「例え血が繋^{つな}がってなくとも、俺は〈勇者殺し〉に殺されたシオンの——“家族”の、仇が取りたい」

カイムが立ち去ったあとの研究所で、アリサが沈痛な顔をしていた。

メルキオラがやれやれと肩を竦^{すく}めて笑う。

「よく笑っていられますね、あの子、シオンちゃんのこ
とになると視野が狭せまくなるのに」

「大丈夫ですよ。軍の偉い人の中には"失敗作"だなん
てカイクムの陰口を言う人もいますが、彼は、そう簡
単にはやられませんよ」

「戦場に出たこともない人が何を根拠にしているのやら
……『はい、そうですか』なんてうなずけませんよ」

「ふふ、酷いなあ」と微笑ほほえむメルキオラ。相手の感情が
読めず、アリサの眉間にシワが寄る。

「でも根拠なら、僕の中に、はつきりとあるんですよ」

「……なら、私が安心して彼を送り出せるように、教え
てくださいよ」

「実に明快ですよ。——彼は僕の最高傑作だ、ってね」
メルキオラが悪戯いたずらそうに肩を揺らし、アリサが深い溜
め息をついた。



ハルダート王国。朽くちた寺院の前。

勝敗は決した。帝国の勇者に包囲された残党軍の部隊
は降伏をした。いまは帝国軍側の指揮官オーロラ・ノー
ブル大尉の判断で、捕虜ほりよにされた残党軍の兵士は後ろ手
に縛られている。連絡を受けた帝国軍の部隊が収容に來
る手はずだ。

カイムは地面に座り込む敵の指揮官に詰め寄った。

「答えろ、〈勇者殺し〉はどこにいる？」

シオンを殺した——そう頭につけることは理性が阻止した。

「……知らんな」

指揮官の男は、後ろ手を縛られ地面に座り込みながら、カイムを憎らしそうに睨み返す。

「何がへ”勇者”殺しだ。まるで帝国にだけ与^{くみ}するお前たちが勇者だと言っているようなものじゃないか!!

この大陸で、勇者といえど大陸全土を守護する存在のはずだろ！ なぜだ!! お前たちが勇者だというのならば、なぜ我らハルダートの民を助けてくれない!! 我が国に

伝わる伝承の勇者レオン・ハルダートのように!!」
「……俺たちはベルカ帝国の勇者だ」カイクが冷めた瞳^さを向ける。

「【パクス・ベルカ】か！　クソくえ、地獄に落ちろ!!」



夜。荒野に張られた帝国軍の野営地で不敵に笑うオーロラ・ノーブル大尉。

「やはりお前たちがいてくれてよかったよ。襲撃による被害もゼロに近い。わずかな被害だつてスグにチャラに

できる」

少女と見間違えるほどの小柄こがらなシルエットの女性。
几帳面きちようめんに結んだ三つ編みをアップにしたレディッシュの髪。
その体格に不釣り合いなベルカ帝国の軍服。襟元えりもとに大尉の
階級章。

その最大の特徴。尖とがった長い両耳。ベルカ貴族の父と、
大陸で100人も生存していないとされる少数民族の工
ルフの母を持つハーフエルフ。現在カイムが所属してい
る605勇者混成独立部隊——通称605部隊の隊長。
そして隊で運用する軽戦車リンデの戦車長。

「たしか血液中の鉄分を介して、金属を操るんだった
な」

「はい、ノーブル大尉」とノーブル大尉の側でカイムが返事をした。

2人の視線の先には、戦車の側に寄り添うセエレ。夕食後。セエレは装甲車と戦車の応急修理をしていた。セエレが親指の腹をナイフで斬り、垂^たれた血を破損^{はそん}した装甲板に塗^ぬりつける。すると歪んだ装甲がスライムのようにブルブルと動き出し、元のあるべき形に戻っていく。セエレの横で見ていた兵士が「おお」と歓声を上げる。「セエレの能力へアダマンアダプトです。操れる金属には制限があるそうなんですが」「いや十分だ。装甲が歪んでないだけでも大分違う」ノーブル大尉が自分の言葉にうなずく。

「さーて、今日やることは大体片付いたな。あとはセエ
レを褒めてやって、次の見張りの奴らを叩き起こして、
それから——うーん」

唸^{うな}りながら逡巡^{しゅんじゅん}するノーブル大尉。しばらく間があつ
てから、カイムを正面に見つめた。

「ふむ……カイム。今回は、実害がなかったとはいえ、
私は、お前に、ちよつとした問題を指摘してやらなければ、
ば、と思っっている」

その言葉は、言うべきか悩んだ末の歯切れの悪さだつ
た。

「俺に問題ですか？」

カイムが首を傾^{かし}げる。自分に不備があつたのなら素直

に聞くつもりだった。

「今回の戦闘では冷静さを欠いていたな」

「そんなこと……」カイムは身に覚えがあり口ごもる。

「お前は優秀な勇者だが、あの子のことになると理性を欠く傾向がある」

仕方ないだろうが。そう悲しそうに微笑むノーブル大尉。

「シオンのことは私も残念だ。仇討ちができるならば、私もしてやりたいと思っている」

カイムは口を閉ざす。シオンの名前を出してほしくなかった。ノーブル大尉の手前、冷静を装うようにしていた。それなのにノーブル大尉自ら、シオンを意識させな

いでほしかった。

そんなカイムの気も知らずにノーブル大尉はさらに追
い打ちをかける。

「だがな、お前が自分を追い込んで、傷つけば、シオン
も悲しむだろう。1人で抱え込むなよ。セイレとミーナ
に相談しろ。お前たちは家族なんだろう、苦しいなら助け
てもらえ。……シオンのことがあってから食事もちやん
と摂^とってないだろ、見れば分かる。ひどい顔だ」

「心遣い……ありがとうございます」

冷静さを保とうと空虚^{くうきよ}な感謝の言葉がカイムの口を飛
び出した。

ノーブル大尉は帝国の貴族としては珍しく、身分や出

身に囚^{とら}われないう女性だった。カイム、セエレ、ミーナ、それからシオンのような帝都の下層区出身の勇者にも分け隔てなく接してくれる。

カイムはそのことでノーブル大尉には感謝していた。だから、いまの指摘が善意のものだと解釈している。セエレとミーナにだって同じように感謝もしていた。血の繋がりはなくてもカイムの人生に温かいものをくれた数少ない人間たちなのだ。

だが「勇者殺し」への怒りはそんな2つの優しい思いを大きく上回っている。考えるだけで目の前が真^まっ赤^かになっっていく。じつとなんかしてられない。

一人の少女が脳裏^{のうり}を過^{よぎ}る。

シオン・アストリア。15歳。

透き通るような銀色の髪。カイムをからかうような笑顔。でもどこか、すべてを受け止めてくれるような優しい紫色の瞳。

身寄りのないカイムとシオンは、幼^{おきな}い頃からずっと一緒にいた。

幼い頃の記憶。

——“家族”？ わたしたち、“家族”になれるの？
うん。1人でつらいことがあっても“家族”がいれば
がんばれる。

——それって、ぶろぽーず？

ちがうよ、“家族”になるだけだよ。

——うーん、分かった。

おたがいに守るんだ。絶対に“ひとり”より“ふたり”のほうが、つよいからな。

——うん。

いまがつらくても、いつか、つらかっただけの昨日になつて、楽しい明日が来るさ。

だから、そんな日が来るまでみんなでがんばるんだ。

——……カイ

なに？

——大好きだよ、カイ！

シオン。シオン。シオン。シオン。シオン——。

血がにじむほど、拳^{こぶし}を握りしめていた。



停車している2台の大型の装甲車——物資の輸送や、要人の護衛に使われるバス型の6輪車。

カイクが寝袋を取りに1号装甲車の後部ハッチから車内に入る。装甲車の車内は無骨^{ぶこつ}な外見に反して快適にできている。立ち上がれるくらい広く、空調も完備。車内の側面には、少し硬いが横になれるようなシートもある。野営を張れば誰が装甲車で眠るか喧嘩^{けんか}になるほどだ。

「——位置的には先行していますから、問題はないと

「思いますよ。エリーゼ様」

車内にいたミーナがなにやら話していた。ミーナの眼前には、装甲車の内部で最も堅牢な場所にかくま匿われていた存在がいた。

エリーゼ・ユナ・ハルダート。

キャラメル色の長い髪をハンチング帽ぼうに隠し、シックな乗馬用の服で身を包んだ小柄な少女。震えたうさぎのように弱々しい瞳。カイムが聞いた話だと15歳。

「問題があつたのか、ミーナ？」

「ああ、カイ。えーと、作戦が変更になつたのかって訊かれちゃってね」

するとエリーゼがカイムを上目遣いうわめづかに見ながら、おど

おどと□を開いた。

「あの、予定とは、かなり違う場所で、野営を張りましたが、ロツタには間に合うのか、心配になつて……」

「それは、問題はないはずだ。襲撃犯は待ち伏せをしていた。ヤマを張ったのかもしれないが、情報が漏れている可能性もある。だから、念のために野営地を変更しただけだ」

カイムの説明にエリーゼがうなずく。そして慌ててカ
イムから目を逸^そらした。

同年代の相手と接するような態度じゃない。吠^ほえる犬
を避けようとするような仕草^{しぐさ}。

「ひょっとしてエリーゼ姫ってカイが怖いのか？ 心配し

ないで大丈夫だよ。むすつとしていても怒っているわけじゃないんだ」

カイムのすぐあとに装甲車に乗り込んできたセイレ。友人が可愛^{かわい}い女の子に怯^{おび}えられていると気づき、おせっかいの一言。

「カイは愛想が少しだけ悪いけど、ちよつと人見知りなだけなんですよ。気にせず、なんでもおっしやつてください。エリーゼ様」

ミーナがフォローした。エリーゼが小さくうなずき、そして祈るように手を組む。

「ハルダートとベルカの間で休戦協定を結ぶためには、ハルダート王家の最後の1人であるわたしがロツタに行



かねばなりません。——どうかよろしくおねがいします」

エリーゼが深々と3人に向かって頭を下げた。

すると、シートの陰からエリーゼの姿を覗いていた少女がわなわなと震えだす。

「ひ、姫さまあ……お^{いたわ}劳しい」

声の主はモナと言う。エリーゼの休戦協定への旅路に同行した11歳の侍^{じじょ}女だ。丸顔でショートにセットされた淡い金髪。清^{せいけつ}潔そうなワンピースを着ていた。

「うう、帝国の勇者たちに……いじめられて……」

「いや、いじめてないってモナちゃん」

セエレが困った顔で訂正する。

「うう、姫さまあ……」

モナが小さく唇を噛む。亡き王に代わり、大きな責務を背負った自分の主が心配でならないのだ。ただでさえ心労が多いというのに、こんなところで心を砕いている姿は痛ましい。

「要人警護って聞いていたけど、僕たちくらいの歳の子だと思わなかったよね」

セイレがカイムに耳打ちをした。カイムがうなずく。自分たちのことは棚に上げて、エリーゼの年齢は若すぎると思っっている。

ハルダート王国とベルカ帝国は、半年に及ぶ戦争に幕を下ろすことにした。休戦協定を結ぶ。

休戦協定には帝国の第三皇子おうじと、ハルダートの権威のある要人が、帝国の街ロツタにおいて顔を会わせ、協定に調印することになっている。

カイムにとって一つの戦争が終わることは、別の戦場に送られるだけに過ぎない。興味はない。だが休戦協定を結べば「ハルダート残党軍の士気を崩すことができる」「そうすれば戦いを有利にできる」とノーブル大尉に説明され、必要なことだと理解はしている。

最初のブリーフィングでは、警護対象のハルダートの要人はハルダートの外相がいしょうだった。だが、この人物はすぐに残党軍に暗殺されてしまった。どうなるのかと思つてみればハルダート王宮は、この2人の少女たちを休戦協

定締結のために、帝国の街ロツタに送り込むことに決めた。

「ひ、姫さまがいくら可憐^{かれん}で、可愛^{あな}いからといって侮^なつてはいけませんよ、貴方^{あなた}！」

モナがぐいとシート^{シート}の陰から飛び出し、胸に手を当てる。

「畏^{おそ}れ多くもエリーゼさまは、神器^{しんき}クラウソラスに選ばれた勇者にて、ハルダートの初代国王であらせられるレオン・ハルダートさまの正当な血統^{けつとう}です。無碍^{むげ}に扱^{あつか}うことは、このモナが……ゆ、許しませんよ！」

わたしの主にひどいことをしたら痛い目に遭^あうぞ。モナは精一杯の威嚇^{いかく}のつもりだが……。

「別に無碍に扱っているつもりは」「ないよね」「ああ」
勇者たちがお互いに見合う。「わたしは平気よ、モナ」とエリーゼが付け足す。

「それなら……別にいいです」
モナがしゅんとうしろに下がる。空回りしちゃったかな、と肩を落としていた。

しよげるモナの姿を気にして、セエレが側によつて屈む。

「ふふん、伝承の勇者もいいけど僕たちだつてかなりのものだよ。僕は【リビングメタル】なんて呼ばれているし、ミーナは【蒼雷の勇者】って異名がある。きつと何十年もすれば伝承の勇者と肩を並べて語られるようになる

るさ」

「で、でも伝承の勇者さまは……大陸で発掘された神器を操る方々のハズです。なのに貴方たちは……」

大陸の伝承で語られるような勇者は、神器という武器に選ばれ、その力を引き出せる者たちのことだった。神器の力を操る勇者は300年も現れていない。

伝承の勇者は人工的に作られた帝国の勇者とは違う存在だった。

「ふふん。僕たちには神器の代わりに〈オラクル〉があるもんね」

そう言うときエレは、車両の修理の際に作った傷に、シートにあつた金属のフォークを押し当てる。ぐにやり

とフオークが手のひらで球体に変形すると、しだいに球体がつままれるように四方に伸びていった。そして緩やかな輪郭りんかくの羽を形作り、蝶ちようの置物へと姿を変える。セエレから、金属の蝶を渡されたモナが「可愛い」と顔を輝かす。

カイムはその姿を横目に見ながら、エリーゼに顔を向ける。

「エリーゼ姫。俺からも質問いいか？」

「……どうぞ」

エリーゼがカイムの言葉を不安そうに待つ。

「へ勇者殺し」という者を知っているか？」

「………いえ、存じません」

シオンを殺した奴だぞ。とカイムは叫びそうになり、自分で驚いた。ノーブル大尉の言葉がよぎり、かぶりをふる。エリーゼは休戦を選んだ姫だ、隠しているワケがないと理性が制した。



雲の隙間^{すきま}から斜めに落ちた紅^{あか}い光が、勇弓川^{ゆうきゅうがわ}の水面をキラキラと光らせていた。

夕刻。ノーブル大尉率いる605部隊はミースの街に到着した。

ミースは、ハルダート王都と、ベルカの国境近くにあ

るロツタとのちょうど中間にある街だ。街の西側には勇弓川の流れが延びていて、その上に大きな鉄橋が対岸へと架^かかっている。勇弓川の流れを利用した河川舟運^{かせんしゅううん}が活発に行われていたことでハルダートの中では交易と商業の盛んな街だ。いまはベルカ軍の占領下ながら、それは変わらない。

軍に用意されていた民間の宿に入ると、ノーブル大尉は指示書を開封し、次の目的地がミースから北西に2日ほどにあるヨンド村であることを隊員たちに告げた。「みな、いいな。私たちは指定されたルートを通ってロツタに向かう。直進ではないからって急いでないわけじゃないんだぞ！」

「はい、分かっていますよお、ノーブル大尉！」でも今日はベッドで休めるじゃないですか」「うわあ、久々の人間らしい生活だ！」あっはっはっ、新鮮なお野菜が食べたいです！」

「はあ」とノーブル大尉は不機嫌そうに2人の部下を連れて宿を出た。ちゅうりゅう隊員が浮かれていることもあるが、ミスにちゅうりゅう駐留する帝国軍に報告と補給への謝辞しやじをしないといけない。子供のような身なりのせいで舐めなられることが多くて、初めて会う人間にはつい警戒してしまう。

用意された宿はミースでは中の上のランクだ。赤い屋根の4階建てで、エリーゼとモナは2階の奥の客室に通

された。隊員たちはノーブル大尉から出された指示に従って警備につく。

勇者の3人は、まずはミーナが宿で待機。カイクが街を偵察^{ていさつ}。セエレが休憩^{きゅうけい}になつた。割り振りをノーブル大尉に任されたカイクの指示だ。

宿の1階。マヨネーズ色の明るい壁紙の食堂フロアにはいまは勇者の3人がいるだけである。ベルカ軍が宿泊していることが知れているので一般の客は恐れて入ってこない。

だが、そんな食堂を興味津々^{きょうみしんしん}に入り口から覗いている一団があつた。

「ミーナ・マリーベルだろ、やっぱりそうだ」「ミーナち

やんだ、可愛い！」「あとの二人は？」「【蒼雷の勇者】だ」
「あとの二人は知らないけど」「いや男はどうでもいい
よ」「ミーナ！ ミーナ！」「推^おしになっっちゃうかも」「あ、
こっち見た」「俺を見たんだよ！」

ミーナに勇者が来たことを耳にして、見物に来た帝国
の駐留部隊の兵士たちだった。

「さすが【彼女にしたい勇者ランキング6位】のミーナ。
そこそこの人気だね」

「6位は言わなくていい」

ミーナはセエレの足を踏みながら兵士たちの前に出た。
「ふふ。みなさま、こんにちは。ブレイヴオーダー社の
勇者。ミーナ・マリールです」

ミーナが百合ゆりの花めいた笑顔を兵士たちに向かって浮かべた。ライフルを背中に隠し、スカートの裾すそをつまみ小さくお辞儀じぎ。淀みよどのない所作しよさ。スカートから覗く眩まぶしい白い太腿ふとももとスラリと長く伸びる脚にオオツと兵士たちがどよめきたつ。兵士の1人が飛び出た。

「あゝあのサインいいですか！ 里の母さんへの土産みやげにしたいんで！」

「ふふ。わたしのサインなんかでよろしければいくらでも致します」

「じゃゝじゃあ写真を一緒に撮ってもらえませんか」

メガネをかけた兵士が、上気した顔で高価なカメラを掲かげて飛び出した。

「美人に見えるように撮ってくださいね」

「は、はい！」次々と兵士たちが、食堂になだれ込んできた。

「はい、お触りは禁止ですよお、それでも僕たち、命令権はなくても少尉^{しょうい}ってことになっていますから、気軽に触ったらひどいことになりますよお。……ねえ、カイ行こうよ。ミーナの営業モードをからかったら死ぬほど怒られちゃうよ」

「ああ。そうだな」

以前、ミーナの営業モードをセエレがひどくからかったことがある。激怒したミーナは、セエレを全力パンチ。体重95キロのセエレを10メートルもぶっ飛ばしたことが

あつたのだ。ああはなりたくない。そろくさとカイクムとセイレは宿を立ち去ることにした。

「カイクン。セイレくん、気をつけてねー」

聞き慣れない甘々しい声色で、こわいろカイクムたちはミーナに見送られた。特殊繊維の手袋をはめたミーナの手には、ペンと、サインをねだる兵士の手帳があつた。

ミーナのサイン会は始まってから30分は経過していた。カメラを持った兵士が、ミーナと他の兵士のツーショット写真を1人ずつ撮影しているから長引いている。ミーナも笑顔をピクリとも崩さず、ポーズを取って応じていた。宿の主は迷惑そうに苦笑を浮かべている。なにせ

兵士たちは1杯のコーヒーすら注文しない。

カラン、カラン。通りに面する扉が開く。来客が現れた。

客は1人だった。小柄な体格。麻色あさぎの真新しいローブを身に纏い、頭には大きなフードを被っている。どう見ても帝国兵ではない。

ミーナは笑顔のまま、その人物を横目に捉え警戒する。おかしな風体。だが、背丈と肩幅から少女だと考えた。店主はまた野次馬やじうまだろうとため息をつく。しかし、予想に反して少女は一度ミーナをチラリと見ただけで、カウンターのスツールに腰掛けた。

「紅茶こうちやをいただけようか」

声は雄々^{おお}しく低いが、確かに少女だった。言葉のアクセントからハルダート人だと分かる。

店主が呆^{あつ}気^けに取られながら「金はあるのかい？」と尋ねる。

「言っちゃんんだが、その、お嬢ちゃん。持っているよ
うには見えねえよ」

「これでいいか？」

少女は懐から金属光沢^{こうたく}のある礫^{つぶて}を取り出し、店主に差し出した。

「あ、アダマントの欠片^{かけら}じゃないか」

店主は瞠目する。大陸で1、2を誇る高い硬度をもつ
鉱石の欠片だ。

「こんな大きな物は久々に見たぜ！ アダマントの鉱山は開戦直後に帝国に盗られちゃったから、いまはミースでも滅多^{めった}には見れない品物だ！ これなら焼き菓子とかフルーツもうんと出せるぜ、お嬢ちゃん！」

「いや、紅茶だけで結構だ。代わりに砂糖^{さとう}を多めに頼む」

店主がよく磨かれたカップに紅茶を注ぐ。少女は大事そうに口をつけてから。

「もつと砂糖を」と店主を促した。

砂糖は貴重ではあったが、店主は砂糖のポットを少女に差し出した。少女はスプーンで砂糖をすくって紅茶に入れた。一度では満足せず、何度も何度も執拗^{しつよう}に繰り返

す。少女は、砂糖が溶けきれずドロドロになった紅い液体をみて満足そうにうなずいた。

「私は昔から食が細くてね。カロリーは砂糖頼みなんだ」

ふふ、と少女が笑った。

冗談なのか。意図が分からず店主が愛想^{あいそ}笑いで返す。気色の悪い紅茶の飲み方だ。だが上客だから無碍にはしないぞ。心の中で、そう自分に言い聞かせる。

「んー」

少女の姿を横目で見ていたミーナは、営業モードのまま、内心では眉根^{まゆね}を寄せた。

ローブの袖^{そで}から伸びる陶磁器のような白い指。フード

からこぼれ落ちている白髪^{はくはつ}は、伸び切ったままパサパサに乾いている。魔女を想起させる怪しい風体——いやそれはいい。

問題なのは右肩に掛けている2つの布袋だ。見た目は釣り竿^{ざお}をしまうようなもの。布袋の全長はどちらも1メートルはゆうに超えていた。

つまり、火器が仕込まれていることを警戒すべき長さだった。



「仮眠をとつたり、飯食いに行かなくていいのか、セエ

レ」

「え、うん」

カイムが偵察についてきたセイレに尋ねると、セイレはバツが悪そうにうなずいた。カイムにとっては「早く帰れ」というつもりで言っただけの言葉だった。セイレの今の仕事は休むことなのだ。なのに偵察に出たカイムのあとを金魚のフンのごとくついて、街の端まで来てしまった。

こういう時は分かっている、とうなずくカイム。

「言いたいことがあるなら言えよ」

カイムが言葉を催促するが、セイレは答えない。カイムがため息。

「子供の頃からそうだよな。お前は自分から悩みや不安を言い出さない。だけど耐えられないからいつも、俺かシオンが聞き出すまで、人の周りをうろちよろしている」

「はは……僕の悪いクセだ……ごめん、カイ……」
セエレの悩みは、好きな子ができた、とか、拳銃^{けんじゅう}が指になじまない、とか、熱心なファンがくれるクッキーが不味^{まず}い、とか内容は様々。

でもいま考えていることは、カイクには想像がついた。「シオンのことか？」

セエレは、怒られるのではないか、と心配するように、伏^{ふしめ}目がちになりながらうなずいた。

「カイは……復讐、するんだよね」

「そのつもりだ」

「別に責めているわけじゃないんだ……。でも、シオンの、その遺体って……」

「確認はできていないな」

カイクが無表情で言う。

「じゃあ……」

——生きているかも。

セエレはそう続けようとして□ごもる。

「可能性は低い」

セエレの言葉を察したカイクが否定する。

「へ勇者殺し」が現れたのは。ハルダートからベルカ帝

都への輸送任務の道中だ。重要物資のな。護衛はシオンをはじめとした勇者3人。うち2人の遺体は確認できたが、重要物資とシオンは確認できていない」カイムはそっぽを向く。これから自分がどういう顔をするのか分からないからだ。セイレに見せる気にはならなかった。

「俺たちの体は機密情報の塊だ。かたまり反帝国の勢力は喉のどから手が出るほど欲しがっている。

太刀打ちできない俺たちの弱点が研究できるし、勇者の複製だって可能になるだろう。何より、帝国の勇者は300年現れていない神器に選ばれた勇者たちと違い、人工的に作られた"まがいもの"の勇者だ、と責めるこ

とができる」

「だから、シオンの遺体は敵が回収したって言うの？」

「だろうな。回収されて、きつと——」

それ以上の言葉は出なかった。

シオンの瞳を思い出す。シオンの細い指を思い出す。

シオンの優しい匂い^{にお}を思い出す。

そのすべてのイメージが鋭利^{えいり}なメスで引き裂かれる。

内臓を取り出され、骨を抜かれ、細かく分解される。そ

の顔が、冷たく大きな瓶^{びん}の中で、保存液とともに標本に

される。跡形もない。人の形をしない。そんなことを想

像して、カイムは唇を強く噛む。すぐに血の味がした。

「シオンはどこかに逃げたって可能性は……」セエレが

言った。

「……」

「生きていて、捕虜にされたっただけかもしれないじゃんか」

「現場にはシオンの体に埋められた魔物の細胞片と血液が残っていたそうだ。……致死量に匹敵するだけのな」
「そうだけど、それでも——」

カイムの言うことはセエレにも分かる。大人たちも死んでいると判断していた。だけど。

「それでも、カイだつて、本当は、信じたいだろ？」

「期待したって辛い^{つら}だけだ」

カイクが鼻をすすった。

セエレが肩を落とす。それ以上は食い下がれなかった。シオンがいなくなっただけで自分も辛い。でも一番辛いのは目の前の少年なのだ。セエレたち家族の中で、一緒にいた時間が一番長いのがシオンとカイムだ。まるで血の繋がった仲の良い兄妹か、長年連れ添った夫婦のように、お互いのことを大事にしているようにセエレには見えていた。

カイムが口を開く。

「エリ―ゼをロツタに送り届けて、へ勇者殺し」が現れれば、シオンをどこに運んだのか吐かせて、殺す。それでシオンを取り戻して、帝国の墓地に埋葬する」
「……うん」

「皇帝の勅令だちよくれいって受けているんだ。やめるわけにはい
かない。お前たちはエリ―ゼを護衛するだけだが、俺は
護衛をした上で〈勇者殺し〉を殺すのが任務の一つにな
っている」

「……うん」

「そうだな、シオンは、普通の墓地じゃなくて、警備の
厳重な研究所の裏に埋葬することになるけど、勇者の体
だから仕方ない。あいつの好きだった花をたくさん供そなえ
てやろう。……もう元には戻れなくても、それがいまの
最善だろ？」

「……」

「俺は、冷静だ。心配しなくていいんだ、セイレ」

カームは振り向いて、小さく微笑む。

セイレは涙がこぼれそうになるのを必死に堪えた^{こら}。眼の前の少年が無理して笑顔を作っていると想像できたし、泣き言も口にしないのに、自分が泣くわけにはいかなかつた。

「一人で先走ることなんてしないさ」

そんなことを言いつつ、カームの頭の中では、

——シオンはこんな俺をなんて思うだろうか。情けない奴、薄情な奴だと責めるだろうか？
そう考えていた。



カランカランと軽い音をたててドアに取り付けられたベルがなった。

サインを受け取った最後の兵士が、カメラを持った兵士と食堂をあとにしたのだ。

ミーナは小さく手を振って見送りながら、静かに営業モードを解除。すぐにローブで全身を覆おおった怪しい少女を確認した。少女は飲み干した空のカップをぼうつと眺ながめている。食堂にはミーナと、少女と、店主の3人しかない。

ミーナはため息をつきながら、軽い歩調で少女の斜め後ろに立った。

「旅の人かな？」

ミーナは、友達になれるかと探るような明るさで、声をかけた。内心ではひやりとしている、自分の勘^{かん}は危険を告げているのだ。

——危険？ 勇者であるわたしが何を恐れるの？
内心で苦笑。

「旅。そうだな……そんなところだな」少女がフード越しにうなづく。

「いまどき珍しいよね。こんな状況のハルダートを旅しているなんて」

「だろうな。でも故郷^{こきょう}なんでね。何年も帰れなければ、急に寂^{さび}しくなまって戻りたくなる」

「そう。……それでさ、その肩にかけたものつて釣り竿かな？」

「違う」

「じゃあ楽器かな？」

「違う」

「大切なもの？」

「ああ、とっておきだ」

「ひょっとして銃かな？」

「ああ。片方はそういう物だ。ライフルというのだな。合っているよ」

少女の声は、どこか熱のないもので、ミーナは人と話している実感がなかった。

「わたしはミーナ。貴女あなたの名前は？」

「レオン。……レオン・ハルダート」

——レオン？ ああ、あの可愛いモナちゃんの言っていた伝承の勇者の名前か……。

「勇者ファン？ レオンって男の人の名前でしょ？ あー。まあいいや」

面倒なタイプのファンかな。そうミーナは首を傾げる。「あのね、レオン。実はこの宿、いまはベル力軍の貸切状態なの。ゴブリン退治の護身用でも、火器を持った客に来られるとすごい困るの。男の兵隊さんに、身ぐるみを剥はがされて、取り調べられることになるかもしれない……女の子だもん、イヤでしょう？」

「ほお、それは困るな」

「そうだね。なら出て行ってちょうだい」

静かに命じるようにミーナが扉を指差す。徐々に剣呑^{けんのん}になるミーナの雰囲気は、カップを拭いていた店主が、火の粉がふりかかることを恐れるように、ビクビクと縮こまる。

「君はベルカの、軍人なんだね？」

さっさと退去しようとしなないレオンの言葉にミーナはイラついた。

「そうだけど」

「勇者と呼ばれているそうだね」

「そうだね、そういわれている。サインが欲しいなら書

いてあげるよ」

「ミーナ。ミーナ・マリールで合っているな？」

「レオン。わたしたちは貴女をどうすることだつてできるの。任務中なら、民間人だつて軍の責任で殺害するこ
とができる。そういう許可が下りているんだ。死にたく
ないでしょう——出ていって」

ミーナは肩にかけたライフルを揺らしてアピールをし
た。

レオンは宙を見上げてから、思案げにして、ミーナに
顔を向けた。

ミーナにはレオンのかぶるフードの中が薄っすらと見
えた。白い肌、細い顎、上品な艶つやのある唇。可憐と言え

るような、それらよりも目についたものがあつた。

「仮面？」

顔の上半分を覆うように装着された金属の仮面。銀色にぬらりと光沢を放っていた。目の部分は開いていて、昏い瞳が見える。まるでアメジストのような瞳だ。誰かに似ている、とミーナは頭の隅で悩む。しかしレオンの姿は怪しいなんてものじゃない。ミーナは、彼女を拘束して取り調べるべきだと判断した。

「ごめん——ね！」

ミーナがレオンの頭から強引にフードを引き剥がす。するとレオンの長い白髪が花咲くように広がった。

「乱暴だな」

レオンが苦笑した。対してミーナはただ黙っている。帝国の兵士と交流していた時とはまるで違う冷たい表情だった。

「ベルカ帝国の勇者と聞いて……あのベルカを思いだした。期待をしたが、みな、似ても似つかない」

レオンが誰に宛てるわけでもなく、ただつぶやく。

「なに？」

ミーナはレオンの言葉の意図が汲み取れずに怪訝な表情を浮かべた。

同時にレオンがゆらりと立ち上がる。ミーナより僅かに身長が低い。

ミーナが頭の中で工程を確認する。上階にいる味方に

連絡し、持ち物をすべて検^{あらた}めて、身元を確認した上で、駐留しているベル力軍に突き出す。喉の声帯マイクを操作しようと指を伸ばす。そこで、わずかに気を反らしてしまう。

その瞬間、パン、パン、パン——3発の銃声がくぐもりながら響いた。

「上！」

ミーナはふいの銃声に驚愕の声を上げた。2階にはエリーゼがいる。まずい。こいつは時間稼ぎの^{おとり}罠か!? その判断した。レオンを無視し、階段に向かって駆けようとした。だが、その進行は、ガクリという衝撃とともに阻^{はば}まれた。

「なっ——！」

ミーナの左手が搦まれていた。走り出せずたたたらを踏む。手を搦む相手——レオン。ミーナはへまなゝが活性化している自分の咄嗟とっさの行動を、力ずくで阻んだ相手に、心の底から驚く。

——100キロのバーベルを片手で持ち上げられるわたしきつこうの力に拮抗する？ ……なんてへまな゠の力。

へまな゠は魔術にも使われる魔導的なエネルギーでもあるが、体内を意識的に巡めぐらすことで、肉体を活性化することができ、筋肉をへまな゠が覆って補助し、臂力りよりよくや脚力などの力が強化されるのだ。

ミーナは冷静そうに振る舞ってレオンを睨み、

「どうなるか分かっているな」声を低くして威嚇。

「どうするんだ？」

レオンが嗤^{わら}う。ギリギリと握力が増す。

——まさか、この子が。

その尋常じゃない力に、ミーナの直感が告げた。

「ミーナ・マリール。——専用の手袋は絶縁^{ぜつえんたい}体。電

撃のヘオラクル^{うま}を上手くコントロールできないための

安全装置」

「っ……わたしたちの情報が漏れている！」

レオンの言う通りだ。ミーナは敵と接触していても、絶縁体の手袋越しでは電撃を流せなかった。ミーナの左手を握りしめるレオンの握力がさらに増す。

「悪いけど——」

締め付けられた左手の痛みにたまらずミーナが、右手でホルスターに収めていた拳銃——6連装のリボルバーを抜き放った。突き刺すように照準をレオンの心臓に向ける。2連射。轟音。ごうおん

同時にミーナの視界が回る。

ガシヤアアン!!

「う、ぐっ——!」

ミーナがうめき声を漏らす。レオンによつて力づくでカウンターに叩きつけられていた。レオンはそうするこ
とでミーナの射撃を無理やり逸らして、回避した。ポツ
ドやカップが砕けて、飛び散り、二人の手が離れる。

胸と頭をカウンターに打ち付けながらミーナはリボルバーを構える右手に左手を添えた。

レオンが自分の麻色のローブを片手で剥いで、ミーナの顔めがけて投げる。

視界を奪われたミーナは反射的に飛び退いて、顔を覆ったローブを剥がす。開いた視界の先には、白い軍服を纏ったレオンの姿。

その姿はミーナの目に鮮烈に焼き付く。

腹立たしいほどの純白の生地。黒と金の装飾。デザインはハルダートのものに似ていた。だが国章も、部隊章もない。残党軍の兵士のように汚れてもない。真っ白で、まだ真新しく見えた。

「そんな格好で乗り込んできたんだ？ 凄い度胸だね」
ふざけやがって。ミーナはそう続けそうになつて口を
噤む。

「そう言われても、いまはこういう服が流行はやりなんだろう？ 不思議なものだ。昔はみな甲冑かっちゅうを纏まとった騎士にあこがれたものなのに」

見せびらかすようにレオンが片手で白い軍服の裾すそをひるがえ翻かえした。

「昔？」

「500年ほど前かな」

「ああ、そういう」

やれやれとミーナは首を振る。

「現代に蘇^{よみがえ}った伝承の勇者様のつもりかな、帝都の下層

区でもたまにいたけど、そういうの」

「信じてもらおうなどと思っではない。分からせてやるだけだ、"まがいもの"の勇者よ」

「"まがいもの"だなんて、ひどいね。もうサインはしてあげない」

2人が睨み合い、視線が交わる。

レオンの胸に向かって、ミーナがまた2発撃つ。

レオンは、当たっても構わないというような不敵さで、ゆらりと左横に3歩進んでこれを回避した。

「試させてもらおうか」

するとレオンが布袋の一つを手を持ち直して、中身を

素早く取り出した。

銀の銃身に白いストック。金色の装飾。ジークフリート・ライフルには採用が見送られた、着脱式の箱型弾倉^{だんそう}。先端には長い銃剣を着剣。ミーナが見たこともないライフルだった。悪趣味な銃だ、と内心で毒づく。

近距離で撃ち合うことにミーナは舌打ちしたが、レオンの次の行動に虚^{きよ}をつかれる。幽鬼^{ゆうき}のようにゆらりと揺れると一瞬で距離をつめて、ライフルを槍のように構える。

レオンが短く咆^ほえる。

白銀のライフル——その銃剣の刃が弧をえがいた。
ギンツ!!

1 テンポ遅れたミーナは、リボルバーの銃身で攻撃を受けた。金属と金属が激しく擦れあ^{こす}って火花が散った。同時にレオンの右膝が、ミーナの腹に叩き込まれた。

「グッ——！」

ミーナが吹き飛び、テーブルに叩きつけられて、背中をうち、砕けたテーブルや皿の破片の中で咳^せき込む。視界がチカチカする。拳銃は落としてしまっていた。

殺される。ミーナが次の瞬間を直感する。

だが、レオンは、ライフルを撃たずに、食堂のカウンターに向かって左手を上げてみせた。

「主人。流れ弾が跳ぶぞ、急いで立ち去った方がよい」
カウンターの奥でブルブルと膝を抱えていた店主に警

告した。

「……あ、あの、や、やめてもらうことは、で、できないのでしょうか？」

店主はおずおずという。30年営業してきた自分の店は惜^おしい。

「フツ。無理な相談だ。諦めろ——早く去れ！」

レオンが叱^{しか}りつけるように怒鳴った。店主は我に返ったように顔を上げて、店の奥の裏口から逃げていく。その姿を見送ったレオンは、ようやくライフルのボルトを引いて、チャンバーに弾を装填した。



客室にいたエリーゼは銃声が聞こえると、震え上がったが、ノーブル大尉に言われたとおりに行動してみせた。隣室に繋がるドアを開けて、隣の部屋に移動したように見せかけて、元の部屋のクローゼットにモナと隠れた。

「レオンさま、どうかお守りください、レオンさま」

暗いクローゼットの中でモナがしきりに、500年前に死んだ祖国の勇者の名をつぶやく。そんなモナの体をエリーゼは擦さすってやった。母親が子供にするように優しく抱きしめる。

「ひめさま……モナ……怖い……で……す……うう」

「そうね、モナ、わたしも怖い……でも大丈夫よ、帝国

の人が守ってくれるわ……」

——残党軍がわたしを捕らえるのではなく、殺め^{あや}るの
が目的なら、ここでわたしは死ぬんだ。

モナをなだめながら、エリーゼは恐怖で萎縮^{いしゆく}する心
中で、冷静に現実を認識していた。

——かあさま。

エリーゼは死んだ母を思い出す。平民出の第二王妃。
戦うことの大切さをエリーゼに教えてくれた。エリー
ゼが年の離れた異母兄にいじめられると、どこからとも
なく馬で現れ、泣いているエリーゼを抱き上げて助けて
くれた。

——エリーゼはレオン・ハルダートさまの血を受け

継いでいるんだから、泣いてないでやり返しなさい。
大好きだった母。

——かあさまのもとに行けるのね……でも、ダメ。
どんなに怖くても、勇者の血統としての義務を果たさなければ、死んだかあさまがわたしのことを褒めてくれるわけない……。

エリ―ゼは出発する前に決意したことを思い出していた。死んだ両親に報いたい。そう思ったからこそ、エリ―ゼは暗殺される可能性のあるこの役目に、自らの意思で志願したのだ。

「さくら、どおしよっかなあ」

この場に似合わない、おどけた男の声がクローゼット

の外からした。部屋に踏み込む複数の足音。これがベル力兵なら決められた合図があつた。クローゼットを決められたテンポで叩く。

だが、それがない。エリーゼはハルダートの残党軍だと確信した。

背後では撃ち合いの音がまた始まつた。605部隊の隊員と残党軍が戦っているのだ。

「先輩、本当にこの部屋なんですか？」

クローゼットの壁越しに、若い女の声がした。

「そうさ、アン隊員。こういうのは相手の気持ちになつて考えるのが大事なのさ。護衛対象を階層のある建物に潜ませるなら高い階層の方が、地上からの攻撃のリスク

を減らせるワケだけど、4階の従業員用の部屋は逃げ場がなくなるので、ちよつと辛いものがある。かといって、3階もちよつと困りものだ。この宿屋は4階建てだけど両隣は2階建てだ。隣の屋根を伝つて、3階に突入するのは容易だからね」

「あたしたちは3階から来たわけですけどね。いっぱい^{わな}毘^{きも}があつて肝が冷えちゃいましたよ」

「んふふ。そうすると2階になるわけだけど、通りに面した部屋は、地上から爆発物の投擲^{とうてき}すら届く距離だ。そうすると2階の奥の部屋にするしかないなつて思うですよ？」

「右の部屋か、左の部屋かは、どう決めتانですか？」

エリーゼのいる部屋は通りから見て右の部屋だった。

「こっちの方から、くあわい、いい女の子の匂いがしたんだぜ」

「気持ち悪くて吐きそうです。先輩」

心底そう思っているようにアンと呼ばれた女がおくびを吐いた。

「ボクは女の子のゲロで喜ぶ趣味はないなあ！」

男が豪快ごうかいに笑った。

「隣の部屋の扉が開いていて、バルコニーへのカギが解錠かいじょうされていた。逃げられたんじゃないのか？」

笑う男に、低い声で報告がなされた。残党軍の兵士だ。精悍せいかんな顔をしている。

「じゃあ、この部屋にいるね」

男がピシヤリと断言する。クローゼットの中のエリーゼの背筋が凍りついた。

「ベッドの下かなあ、隠れんぼなら、子供の頃からの大得意さあ」

暗いクローゼットの中。エリーゼは冷や汗の浮いた頬を拭^{ぬぐ}った。モナを見る。モナがエリーゼの視線に気づいて顔を上げた。弱々しく涙を流すモナの瞳を見て、エリーゼは勇気を振り絞って決意する。

エリーゼはモナを突き放し、クローゼットの奥へと押し込んだ。

「な、なにをなさるんですか、姫さま？」

「しー」

エリーゼは振り返り、静かに、扉が開けきらないようにクローゼットから飛び出した。犠牲になるなら、1人で十分だと考えたのだ。

「おお、クローゼットか。ボクは母さんに「クローゼットで遊ぶな」って言いつけられていて、かくれんぼには使わなかったから気づかなかったなあ」

男はクローゼットから出てきたエリーゼの姿を認め、裏をかかれたな、と笑った。

男の姿はエリーゼの予想とは違うものだった。女もだ。周りの兵士たちは、ハルダートの野戦服の上に麻色のポンチヨを羽織った姿で、ハルダート残党軍であることが

見て取れた。だがこの2人は違う。

男の方は蜂蜜^{はちみつ}色のブロンドをキザったらしくオールバックにまとめ。大柄な体格を覆う背広にループタイをしている。アンと呼ばれていた女の方は、シャギーの入ったセミロングに、パンツルックのスーツ姿だった。

エリーゼには、兵士というより、新聞記者とか、やり手の商売人に見えた。

「ボクは、ヘクター・ショーといいます。エリーゼ姫さま。同道^{どうどう}願います」

ヘクターはダンスにでも誘うように丁寧^{ていねい}にエリーゼにお辞儀^{しげい}をする。

大柄の男の姿にエリーゼの背筋が震えた。笑っている

が攻撃的な威圧感があった。

「ああ、でもエリーゼ姫さまが、本物か、どうか、分からないな」

ふと頭を上げたヘクターは、心底困ったように口を尖らせた。

「本部からは、抵抗されたらバラしていいって言われてるんだから、お言葉に甘えましょうよ、先輩。この子を抱えて本部まで行くのは面倒ですよ」

アンが冷淡に言い放った。貴女に興味はない。エリーゼを見つめる瞳がそう語っていた。

「ううん、でも任務とはいえ子供だし、高貴な人でもあるからなあ。気が引けるなあ。それにあの人も怒るだろ

うし……」

「構いませんよ。先輩の上司は誰ですか？ 本国の偉い人たちであって、あの人ではないでしょう。連れて帰って確認するなら死体で十分じゃないですか」

エリーゼは言葉の意味を耳で反芻はんすうした。連れて帰って確認する。

エリーゼは、本来ならば王位継承権も低く、15という歳のため、王族として表舞台に立つ仕事をしたことは数えるほどしかない。たまに亡きハルダート王に連れられ、こくひん国賓と劇に行く程度。あまり国民に顔は知られていない。ヘクターたちにはエリーゼが本物か、にせもの偽物か、の判断が付かないのだ。

1歩、2歩、エリーゼは震える足で、残党軍部隊のリーダーであると思えるヘクターのもとへ歩を進めた。ヘクターがエリーゼを迎え入れるように、大きな体を小さく屈める。エリーゼと目線の高さが合う。

——いまだ！

エリーゼは上着に隠したナイフを抜くと、その切っ先を無警戒だったヘクターの首元に突き立てる。王族用に設えられた上品なナイフだった。ヒルトには王家の紋章がある。

「お前ッ！」

アンが慌てて拳銃を抜き放ち、銃口をエリーゼに向けた。

それを跳ね除けるようにヘクターが手で制す。ヘクターは状況を楽しむように、ニタニタと笑っていた。エリーゼのナイフを持つ手がガタガタと揺れる。それでも勇気を振り絞る。

「あなたたちにまだハルダート軍の誇りがあるのならば、すぐに兵を退^ひきなさい！ ベルカとハルダートは和平を結ぶのです。これ以上の血を流すことは許しません。エリーゼ・ユナ・ハルダートの名において命じ——」

「あゝ残念。他は兎^とも角^{かく}、ボクとアンちゃんはハルダート軍出身じゃないよお、ふふっ」

ヘクターが吹き出した。

「えっ？」

エリーゼがヘクターの態度に疑問符を浮かべるのと同じ時だった。

「気に入った！」

ヘクターが快哉かいさいの声を上げた。ナイフに構わず、ダンツとエリーゼの頬を激しくうった。大きな手のひらが振り抜かれて、勢いに負けたエリーゼが壁に叩きつけられる。小さなナイフを落とす。口の中を大きく切り、唾液だえきにまみれた血が、薄い唇から垂たれる。

「っん」

床に捨て置かれながら、エリーゼの目尻めじりには涙がたまる。頬がズキズキと痛む。耳がキーンとなつて聞こえない。衝撃の抜けない頭で、涙を堪えながら、痛みを耐え

る。

「うさぎちゃんみたいな弱々しさでコレだ。この子、確かにあの人の血統だわ。連れて行こうアン隊員！」

「ナイフつきつけられて気に入ったなんてマゾですか先輩……。というか本気パンチしたからサドか」

「いやいや、本気だったら顎を砕いていたと思うよ」

「うわ、ていうかマジですか、先輩の気分だけで決めたでしょう？」

「この子、きつといいリーダーになるよ。ハルダートのね。ならばアスガルのためになるかもしれない」

「……アスガルス」

自分の不^ふ甲^が斐^いなさに唇を噛み締めエリーゼがその名を

つぶやく。

ハルダートの西にベルカ帝国。東にはアスガルズ。帝国に並ぶ強国だ。

アスガルズはベルカ帝国のアスガルズ侵攻を遅らせるために、ハルダートの残党軍に武器を提供している。エリーゼはそう教えられていた。



「ふーっ!!」

ミーナの心は怒りに震えていた。

殺せる状況で殺されなかったことで、戦士としてのプ

ライドを傷つけられた。

だが理性では好機をとらえていた。ミーナが体内に取り込んだ発電器官は、ミーナの興奮に連動して、細胞膜の性質が変わる。結果、イオンのバランスが大きく変化し、電圧が上昇するようになっていたからだ。

「わたしの情報を知っているなら、わたしを怒らせればどうなるかも分かっているよね？」

ミーナは怒りのこもった刺々^{とげとげ}しい声色を発し、薄桃色の唇で指を加え手袋を外す。体表に小さな稲妻が迸る。落とした拳銃のかわりに、銃剣のついたライフルを握った。安全装置を解除し、引き金に指をかけた。

「死んだことも気づけないくらいに、稲妻を流し込んで

あげるよ」

「やれるものならやってみろ、と言わせてもらおうか、少女よ」

銃口をお互いに向け合う。

ミーナとレオン、同時に引き金をひいた。

ダダンと轟音。

鏡合わせのように右に跳ぶ。お互いに弾は当たらない。だが、ミーナの方がより敵の射線に近かった。ミーナは構わず、着地した右足に力を込めて、銃剣の刃をレオンに突き入れる。

レオンが大きく跳び去りミーナの刺突^{しとつ}を躲す、そしてライフルを構えたまま壁に着地。そのまま、重力に負け

て落下する前に、さらに上へと跳ねた。

その影を照準で追いながら、ミーナはレオンに稲妻を纏った弾丸を連射。バチバチと破裂音。だが、すべてが空を切り、壁が穿^{うが}たれる。

「さあ、どうする"まがいもの"！」

レオンが体をひねり、迫る食堂の天井を右足で蹴る。ミーナは頭上を取られた形だ。レオンが重力と脚力の勢いのまま、銃剣でミーナに向かつて突進する。

ダッアアアアン!!

「ッ！」

ミーナがすんでの所でレオンの突進を躲す。寸前にミーナの立っていた木材の床が盛大に割れ、床板が天に

向かって伸びる。まるでカイムのようなへまなゝの力だ。ミーナが舌を巻く。だが、負けるつもりはない。

「喰らえッ!!」

レオンの腿を狙って、銃剣を横に薙^ないだ。即応のカウンター。ミーナの口角がわずかに上がる。銃剣の刃に青い閃光がスパークした。だが――。

「阻まれた!？」

稲妻を纏う刃はレオンに届かなかった。刃はスパークしながら、レオンの手前の空間で、何かの塊にぶつかる手応えがあり、届かずに停止した。ミーナはすぐに飛び退いた。

刃の停まった空間。黄^{だいだい}橙色に輝く半透明の膜があつた。

その膜は、レオンを中心に、体を包むように球体を形作っていた。まるで結界。この能力は――。

「まさかへオラクル〜!!」

ミーナが愕然^{がくぜん}とした。この奇跡の技。だが詠唱^{えいしょう}はなかった。ならば火薬の発展とともに廃^{すた}れていった戦闘用魔術ではない。ブレイヴオーダーの技術が漏れたのだ。

勇者の体に宿る錬金術と科学技術の産物。

殺された勇者は3人。だが回収できた死体は2つ。シオンの遺体は回収できなかった。

敵がシオンの遺体を研究して、へオラクル〜を――。

「へオラクル〜? ――違うな」

レオンを包む結界が消失。レオンが銃剣を伸ばして踏

み込む。ミーナも銃剣で応じ、斬り合う。苛烈な剣戟^{けんげき}を繰り広げる。だがミーナの方が劣勢だった。隙をついての一撃が、ことごとく、再出した球体の結界に阻まれた。

「帝国の勇者は弱いな」

「なに!？」

「格下ばかり相手にするから戦士としての勘が鈍^{にぶ}るのだ」

「そんなこと——!!」

「だから、自分以上の相手が現れればすぐに動ずる。攻撃の呼吸を読まれる」

「くっ——攻撃のたびに結界を消すなら——」

——同時にしかける!!

ミーナは意を決した。

ガンッ！

レオンが放った、銃口の反対側にある木製のストックでの殴打をわざと受けた。肩に衝撃が走った。ライフルを左手だけで握み、よろめいてうしろに倒れる。右手を床に伸ばす。

「終わりだ」

結末を予測したレオンが踏み込んで、床に倒れたミーナを銃剣で貫こうと、ライフルを片手で伸ばす——結界が消失する。

同時にミーナは右手をレオンに向ける。その手には落としたリボルバーが握られている。

迫るレオンの刃に構わず、ミーナはリボルバーの2発
しかない残弾を放つ。

バン、バン!!

ミーナの相打ちをも覚悟した決死の攻撃だった。

その瞬間。レオンの仮面の奥のアメジストの瞳が、力
ツと鮮烈な光を帯びる。

右手の銃剣が軌道をかえ、左手で肩に掛けた布袋を手
に取り、急所をかばうように眼前でクロスさせた。弾丸
のうち1発がライフルをえぐり、1発が布袋ちようだんに着弾。金
属を叩く音が響く。布袋から跳弾した弾丸が、レオンの
肩口を浅くえぐった。

「うそ……なんで………」
それを「……」

ミーナはフラフラと立ち上がりながら啞然とした。決死の攻撃を防がれたからじゃない。それ以上に驚愕にうちめされるものがあつた。

レオンが左手に搦んだ布袋が、弾丸に引き裂かれ、布がはらりと落ちる。中身が晒さらされた。それは火器ではない。それ以上に危険なものだつた。

作戦前のブリーフィングで見せられた1枚の写真。シオンたちが、死の直前に、輸送をしていた物の正体。ハルダート王都から、ベルカ帝都への輸送——その重要物資。

帝国軍に押収されたハルダートの国宝。いや人類の宝。伝承の勇者レオン・ハルダートが操つたとされる——。

「……神器……クラウドソラス」

一メートルを超す白亜はくあの刀身。革の巻かれたグリップ。剣の種類でいうならばバスタードソード。勇者レオン・ハルダートの神器。

「そうだ、稲妻の少女……これが真なる勇者の証だ」
ミーナの記憶にあつた白く美しい剣。だが写真で見たそれとは決定的に違うところがあつた。

シウウウウウ——。

刃の表面が、オーロラのような淡い輝きを纏っていた。その輝きは、瑠璃色るりを基調としながら、様々な色が入り乱れ、まるで虹のようだった。

「なぜ、シオンが運んでいたクラウドソラスを貴女が!？」

気が動転したミーナに向かって、レオンが閃光のようにクラウソラスを振るった。長大な剣から放たれた斬撃を、ミーナはライフルの腹で受け止める。ライフルがくの字にひしゃげ、キンツと、残弾の残るクリップが勝手に排出され、パーツが弾け飛んだ。

「このツ——！」

ミーナは壊れたライフルをレオンに投げつけた。レオンはクラウソラスでそれを叩き落として、右手のライフルで狙い撃とうとする。だが弾丸は発射されなかった。ミーナのさきほどの攻撃で、チャンバーを穿たれて動作不良を起こしていた。

「勇者に及ばなくても、腕は悪くない。時代が違えば、

よい騎士になれたろうに」

レオンはライフルを投げ捨てた。そしてクラウソラスを両手に構える。

同時にミーナも残弾のない拳銃を捨てて、迅速にナイフを逆手に抜いた。

ミーナが目を見開く。レオンに侮辱ぶじよくされたと理解していた。

「騎士？ ふざけるな!! わたしは"勇者"だ!!」
「たわごとを——」

レオンが繰り出したクラウソラスの斬撃を、ミーナがナイフで防いだ。ナイフが刃こぼれし、欠片がとんだ。次いで放たれた二撃目をミーナが避けた。三撃目は避け

そこなつて腹を薄く裂かれる。そこに、ひどく重いレオンの蹴りが飛んできて、ミーナは入り口のドア側の壁に押し込まれた。もう一撃、レオンの膝がミーナに追撃を加える。

「その程度で勇者を名乗るな!!」

レオンが咆える。

ドゴオオンッ!

激しい音と共に壁が崩れ、ミーナの体は瓦礫^{がれき}とともに通りに投げ出された。薄く土煙が舞う。

「勇者のみが作り出せる、人を超えたへマナ」の力。匹敵するものを作ろうと、魔物を身に宿したな。おそらく君は、ただ雷をあやつる魔性を埋め込まれ、その能力を

得た」

レオンはクラウソラスを地面に向け、ミーナに飛びかかった。ミーナは跳ね起きて回避する。さらに返す刀のクラウソラスの一撃をナイフでなんとか受けた。

「クツ……間違いない、貴女がへ勇者殺し——!!」

堪えながらミーナは確認するために叫ぶ。空色の瞳が殺意に燃える。

「"勇者"を殺したことはない」

レオンの言葉は侮蔑ぶべつの色に染まっていた。

「なにが言いたい!!」ミーナが怒りのまま咆える。

「私が殺したのは、勇者を作り出すという、人の分を超えた愚かな願いのために生み出された、"まがいもの"、



だけだ」

心が凍えるほどの冷淡さでレオンが応えた。ミーナはそれを問いの肯定と捉える。

ミーナの脳裏にシオンの顔が過った。

シオン・アストリア。自分より年下の可愛い妹分。

——大丈夫。

幼いミーナは、植え付けられた発電器官をコントロールできず、多くの仲間や施設の大人たちを傷つけた。"不良品" そう陰口を叩かれた。放電する力を抑えられず、誰とも触れ合うことを禁じられた。孤独に耐えられず、心が押し潰されそうになった。

——もう大丈夫だよ。

ある時、目の前に現れた小さなシオンが、ミーナの放電する手を、優しく握った。電流による痛みを感じて、いることなど気づかせない笑顔を浮かべ。

——わたしと“家族”になろう。

嬉^{うれ}しかった。暖かった。涙が溢れた。うなずいた。年下なのに、そんなことも意識しないくらい仲良くなれた。ずっと友情が続くと思っていた。

あの時まで。

シオンが死んだと、聞かされるまで……。

「シオン!! よくも、よくもシオンを——!!」

ミーナが絶叫する。全力全身でクラウソラスを押し返

した。ナイフを順手に戻す。青い光が右手に迸る。

ナイフを親指と人差し指で保持しながら中指から下の指で額をなぞった。

キイイイイイン。

瞬間、目にも留まらぬ速さでミーナがナイフを閃きらめかす。レオンの急所を貫こうと、ナイフによる連撃が繰り出される。

「ほう——なるほど、面白い。脳の運動野を直接、電流でコントロールしたのか」

さしものレオンも防戦に徹した。ナイフと大剣とでは攻撃速度が段違いだ。ミーナのスピードに舌を巻く。剣を振り切らず、刀身でミーナの剣閃を、ただ防ぐ。

へブリッツヘックスのその最大の真価。

人間の脳は電気信号を送って手足を操る。ミーナはその電気信号にへブリッツヘックスで介入して、自分の反射速度を超えたスピードでの攻撃を繰り出していた。

「だが——稲妻の少女よ」

このへブリッツヘックスの使い方にはデメリットが2つある。

一つは加減を間違えれば自分の脳を焼き切ってしまうこと。繊細な技だった。

もう一つはへブリッツヘックスでコントロールした攻撃は、電流を流した際に決めたモーションしか辿^{たど}れないということ。攻撃中に攻撃の軌道を変えることができ

ないのだ。

「怒りに身を任せたな」

ミーナはミスを犯した。クラウソラスの攻撃を、これ以上ナイフで防ぐことができないと判断して、自分の攻撃の手数を増やすために、一番モーションの早い、“突き”を、多く繰り出すように脳の運動野に介入した。それは、確かに剣聖の放つ剣技のように神速を誇った――。

しかし。

「単調だ」

レオンが断言した。そしてミーナの攻撃の隙を見つけ。その一瞬を逃さず、虹色を纏う剣を翻して、苛烈に振り下ろした。

「そん……な」

クラウソラスが、ミーナの体を、斜めに、引き裂いた。



「すごいでしょう。あの人、正真正銘の神器使いですよ。クラウソラスで結界を操っていますでしょう。つまり300年ぶりに大陸に現れた、真の勇者」

玩具を自慢する子供のようにヘクターは言った。エリ―ゼは無残な姿になった食堂に、ヘクターとアンに連れてこられ、戦闘の一部始終を見せつけられていたのだ。

「ほら、ご挨拶しましょうか」ヘクターが強引にエリ―

ゼの腕を引っ張った。強い握力で締め付けられる痛みに負けて、エリーゼがヘクターのうしろをひきずられるように歩む。

ヘクターとエリーゼが通りに出た。

「そんな、ミーナさん」

エリーゼが自由になっている方の手で口を覆う。ミーナは仰向けに倒れていた。地面には目を覆いたくなるような大量の血が流れ出している。白い頬も血で赤く染まり、胸が弱々しく上下していた。凄惨^{せいさん}な姿だ。だが、まだ生きている。

「ミーナさん！」

エリーゼが駆け寄ろうとするが、手首を締め付けられるへ

クターの握力が増して、たたらを踏む。

エリーゼは力づくに、ミーナを斬った仮面の少女の方へと突き出される。

「君が……エリーゼだね」

レオンがエリーゼに振り返る。仮面にはミーナの返り血が付いていた。そんなおぞましい姿とは打って変わって、レオンは優しい声を発していた。

「君を捜していたんだ。——私はレオン・ハルダート、君とハルダートを守るために、そのために戻ってきた」
「レオン……ハルダート……？」

その名はハルダートの勇者の名前だ。エリーゼは、何を言っているのか、と聞き返したくなる。だが、同じ年

頃の少女が放つ圧力に押し潰されそうになって、奥歯がカチカチとなった。

「エリーゼ、私を怖がる必要はない、いまは姿こそ違うが、私は本物のレオン・ハルダートだ。君の——いや、君たちハルダートの民の味方だ」

レオンが手を伸ばし、エリーゼの頬を撫でた。

「味方……こ、こんなことをして……」

レオンを名乗る人間が帝国の勇者を斬った。これで休戦協定が白紙に戻ってしまったらと考えるとエリーゼの頭が真っ白になる。

「休戦協定のことを心配しているんだね」

「と、当然です、わたしは、休戦協定を結ぶことが、ハ

ルダートの未来のために――」

「率直に言う。エリ―ゼ、休戦協定を結ぶのはやめてほしい。」

休戦協定はハルダートに不利な条件で結ばれる。これは降伏と同義だ。それに王家の最後の人間である君が調印したとなると、ハルダートの民は誇りを失うことになる」

「これ以上、ハルダートが戦うことなどできません！食糧も、お金も、火薬も、鉄も、なににも残ってはいないんです!!」

「だが"力"ならばここにある」

レオンが小さく神器を掲げる。夕日の赤い光を浴びて、

虹の剣が怪しく輝いた。

「……クラウソラス」エリーゼがその剣の名をつぶやく。
「そうだ。勇者の神器だ。”まがいもの”の勇者とは力の次元が違うことは理解できたハズだ。この力で、ハルダートから帝国の勢力を駆逐^{くちく}し、そして大陸からベルカ帝国を一掃^{いつそう}する」

「そんな……そんなことできるはずありません！これまで以上の戦争になればハルダートはもう立ち直れなくなります!!」

「ふむ。君は、いまの戦いを見ながらも、神器の力——勇者の力を、まだ信じられないようだ。この”まがいもの”が、しぶとく息をしているから、私が帝国の勇者たち

を相手に、勝てないと案じてしまふのだろうか？」

レオンが虹色に輝くクラウソラスの切っ先を虫の息のミーナに向ける。

「違います、わたしが言いたいのには、戦う以外の道を選ばなければ、国民が――」

「悪とは戦うものだ。それが勇者の使命だ。君とはあとでゆっくりと話し合いたい。……私が本物の勇者だと証明すれば、降伏をしようなどという臆病風も吹き飛ぶだろう。……ヘクター、下がっている」

ヘクターは「はいはい」と返事をし、エリーゼの手首を無理やり引っ張って食堂の中へと戻ろうとする。エリーゼは体を引かれながら、揺れる瞳で、ミーナの痛まし

い姿を案じた。

「待って!! ミーナさん!!」

レオンが息を大きく吸った。

「見よ、ハルダートの民よ!! 君たちの勇者レオン・ハルダートはここに帰ってきた。帝国と、帝国の勇者を駆逐し、大陸とハルダートに、平和をもたらすと、ここに誓おう!!」

通りには人はいない。みな戦闘の音に怯え、建物の中に隠れてしまっている。だが気づいた、そして知ってしまった。レオン・ハルダートを名乗る少女が、帝国の勇者を切り伏せたことを。

ある者は恐る恐る窓から顔を出した。ある者は柱の影

からこっそりと覗き見る。聞き耳を立てるだけの者もいた。

奇妙な熱気が辺りを包んだ。それは、悪の断罪を望む、力なき正義感の総意だった。

民衆の視線を感じながらレオンは、クラウドソラスを振り上げる。

「決着はついていきます、やめさせてください!!」

エリ―ゼはヘクターにすがりつく。ヘクターは恍惚こうこうとした表情でレオンを眺ながめていた。

クラウドソラスの刃が、ゆらりと、輝く。

これから行われる正義の断罪に、遠くの民家の窓から覗いていた少年が、ゴクリと喉をならす。同時に、目を疑う。窓の外を黒い影が、火の粉のような光を纏いながら疾走^{はし}った。

帝国の勇者が殺される世紀の瞬間をこの目に焼き付けようとした太った青年が「やれ、やれ！」と声を上げる。同時に、自分が身を隠す建物の屋根に、何かが着地した大きな音に気づいて、空を見ると、影が弾けるように飛んでいった。屋根の瓦が飛び散り、青年のもとに降り注ぐ。

止めるべきなのかもしれない。そう思った女がいた。だが言い出す勇氣は持ち合わせてはいない。その側を影が駆け抜け、巻き起こった衝撃を浴びて、女は尻もちをついた。

「つつ——！」

ミーナが呻^{うめ}く。抵抗しようと四肢に力を込めるが、手足が動かなかった。

「案ずるな少女。死ぬだけだ。赤子^{あかご}にだってできることだ」

レオンが大衆の熱気を肌に感じながら、期待に応えるために、断罪の剣を振り下ろす——。

ギュオオオオオオオ!!

その瞬間。空気を裂く音とともに、通りを駆け抜けた影がレオンに接触——レオンの姿がかき消えた。

民衆にはそう見えた。何が起こったか分からずに、皆、啞然とする。そして、通りの真ん中を真一文字に地面が噴火^{ふんか}するように土が舞い上がって、それが南の通りへと移動していくのを目で追った。

その場に残ったのは虫の息のミーンナと、夕日の日差しに紛^{まぎ}れてキラキラと赤く輝く火の粉のような光の残滓だけだ。

目にも留まらぬ超高速でレオンに肉薄した黒い影。接

触すると同時。レオンと影は、影の飛び込んだ勢いのまま、通りを100メートル以上も一瞬で南下していった。「お前かあああああああああああああああああああ!!」

影——カイムが叫んだ。

レオンは結界を張ることも間に合わず、クラウドソラスでカイムが突きこんだ銃剣を受け止めていた。

ギギギイイイイイイ!!

刃と刃が激しい火花を散らす。カイムの勢いを殺せず、押し出される形で、レオンは自分の踵で地面を抉^{えぐ}つていった。ブレーキがかかる。だが、なおも勢いが止まらない。

レオンは驚愕に目を見開いた。

「なんだ、この桁^{けた}違いのへマナへの出力は——!!」
へマナへそのエネルギーを体内に巡らせることで身体能力を向上させることができる。これほどの力はへマナへによって強化された四肢から繰り出されたものに違いはない。だがその力が桁違いだった。尋常ではない。

「だが——この程度で私に勝てると思うなッ!!」
すかさずレオンは上半身を跳ね上げ、クラウソラスでカイムの銃剣を押し返した。

同時にカイムは体を捻^{ひね}って虹色に輝くクラウソラスに蹴りを打ち込んだ。

「グッ——!!」

レオンは右足を軸に一度地面の上をコマのように横に回転することで、その勢いを殺した。クラウソラスを地面に突き立てる。

「何者だ！」

「カイク。カイク・ミラー!!」

カイクも蹴りの体勢から着地。片手で持ったライフルで、さらにレオンの心臓を貫こうと突進する。瞳が鮮烈に開かれていた。

「ヘクターの情報になかった帝国の勇者か!!」

レオンは虹色に輝くクラウソラスでカイクの刺突を受け止める。

カイクの名前を聞いて、レオンは思い出していた。へ

クターからもたらされた情報によるとカイクについては不明の点が多かった。固有の〈オラクル〉というのも確認できていない。

——いや……このレベルの〈マナ〉の活性化は、能力といっても差し支えはないが……。

「それはクラウソラスだな!!」

斬り結んだ状態でカイクが咆える。感情が制御できずに声が震えていた。

「——いかにも」

「お前が〈勇者殺し〉で間違いないんだな!!」

「ああ、さっきの稲妻の少女にもそう言われたな、相違ないだろう」

レオンが鼻で笑う。"まがいもの"を殺してもへ"勇者"殺しゝなのかと思うとおかしかった。

「クラウドソラスを輸送していたシオンたちを襲撃したな!!」

交差する刃越しにカイクが射殺するような視線を投げる。

「シオン? ああ、確かにそうなるな」

「シオンの……た……いは……」

「ん？」

「ツ……シオンの遺体はどこにやった——!!」

シオンの遺体——カイクがいままで□に出せなかった決定的な言葉を放つ。眼の前が真っ赤になる。

「知らんな、その辺りに捨て置いた、欲しがる奴が持つ

ていったのかもな……それより私も、君に聞きたいこと——」

「シオンを殺して辱め^{はずかし}た！　その上、ミーナまで——絶対に許さん!!」

カームが力に物をいわせてレオンを弾き飛ばす。
「っ——！」レオンが衝撃に耐える。

カームは、うしろへと吹き飛ばレオンに向かってライフルを速射する。

「勇者殺し」……心の底から相手を呪う。

殺してやる。死を懇願するほど痛めつけて、全部吐かして、それから殺してやる。シオンを殺したことを心の

底から後悔こうかいさせてやる。

その剣でシオンを斬り裂いたのか。その手でシオンを殺したのか。

よくも、よくも——シオンを殺した奴が息をしているなんて耐えられない!!

レオンは結界を展開した。カイムの放った弾丸が黄橙色の結界に阻まれ、宙で止まり、地面に落ちた。

「こちらの質問を——やれやれ」

カイムはレオンの言葉に聞く耳持たずと、殺気立ってレオンを睨む。ライフルを操作し、クリップを残弾と共に排出。新たなクリップを装填。すぐに連射。

「無駄なことだと分かれ少年」

レオンが諦^{あきら}めたように黄橙色の結界を再展開する。力
イムの放った弾丸が再度、結界に着弾。

「なに――!?」

レオンが驚愕する。弾丸はレオンの予想を違え、結界
の膜に潜り込んできた。

「ミスリル徹甲弾。お前みたいにへまなで身を護る奴
を殺すための弾丸だ」

「へまなを切り裂くミスリル銀を撃ち出したのか!?」
ミスリル徹甲弾。へまなを帯びた金属、ミスリルで
作られた、針のように尖った弾丸だ。徹甲弾が硬い対象
を貫くための弾丸なら、ミスリル徹甲弾は、通常の徹甲

弾では貫通できない、ヘマナを帯びて魔導的に強化された装甲や、竜の鱗りゅうこうを貫くために開発された弾丸である。だが、カイルが舌打ちする。期待した効果は得られなかった。

ミスリル徹甲弾は、ヘマナでできたレオンの結界を突き抜けた。しかし、貫通しただけで勢いを失い、力なくレオンの足元に転がり落ちたのだ。

「結界に阻まれるなら、懷に飛び込んで！」

構わずカイルが地面を蹴った。ヘマナが肉体を活性化する。銃剣を真まっ直すぐレオンの胸に向かって伸ばす。ジジ、と結界に剣先が食い込む。銃口を結界の内側に侵入させようと力任せに押し込む。

「でたらめな膂力だな、この結界はそんなヤワなものは無いのだがな」

レオンが舌を巻く。

たまらず結界を解き、侵入してきた銃剣を、クラウドスで弾く。受け流されたカイムは姿勢をコントロールし、すぐに二撃目を送る。クラウドスが斬り返す。斬り結び、激しい剣戟が響く。何度も斬り合う。お互いに姿勢を変え、足さばきを変え、優勢を取ろうとする。

シオン。シオン。シオン。

シオンを殺した？ 俺のいない場所で、俺のいないことをいいことに！

痛かったろうに、苦しかったろうにシオン——！
シオン。その名を脳裏に繰り返すたびに怒りのボルテ
ージが上がっていく。
よくも、よくも！！

「まるで、^{けもの}獣だ」

レオンが、カイムの左薙をクラウドスで受ける。カ
イムのすさまじい膂力を殺しきれず、ただ弾く。弾いた
反動の勢いに乗って、さらに加速したカイムの右袈^け袈^さ斬
りが振り下ろされる。

「こんな力任せではな」

レオンはその攻撃を紙^{かみ}一^{ひとえ}重で避ける。

カイムの銃剣が起こす暴風が、ぶおんと、レオンの仮面に覆われた鼻先を横切る。

次いで左斬り上げ。「単純な動きだ」とクラウソラスで受ける。レオンが瞠目する。

——軽い？

威力の弱い一撃。レオンはフェイントとすぐに気づく。そう判断する前にカイムがライフルを反転。ストックでレオンの腹を殴る。

「ぐっ——！」

レオンの体かくの字に曲がった。

カイムがライフルのグリップを握り直し。すぐに銃口が火を噴く。

弾丸が、レオンの仮面を掠^{かす}める。火花と小さな金属片が散った。

「ツツ！」

レオンが呻く。掠めただけでも弾丸の保つエネルギーはレオンの頭部を揺さぶり、仮面をななめに引き裂いた。レオンが、落下しようとする仮面を片手で支える。

「これで、終わりだ!!」

カイムの右目の虹彩^{こうさい}が煌々^{こうこう}と輝いた。

銃剣をふりかぶり、渾身^{こんしん}の力を込める。

憎しみを込める――。

いや違う。

ただ思い知れ。

シオンの痛みを思い知れ。

シオンの苦しみを思い知れ。

シオンの絶望を思い知れ。

「ちっ」

窮地きゆううちにレオンが舌打ちする。仮面を押さえた手を剣の

柄つかに戻す。片手ではカイムの膂力に勝てる見込みがない。

手を離れた仮面が2つに分かれて地面に落ちた。

激しく斬り結んだ。

耳をつんざく一際大きな剣戟。

銃剣と神器とが、ぶつかり合って、拮抗する。

だがウーツ鋼でできた銃剣が悲鳴を上げた。半分の位置で折れる。

折れた刃が地面に斜めに突き刺さった。

「そんな——」

カイムの口から反射的に言葉が漏れた。

驚愕に目を瞠る。

眼の前の女の晒された素顔。

手が震える。

「違う、そんなわけがない」

だって、あの子は艶のある銀髪で——。

「お前が……そんな……」

紫の——アメジストの瞳だって優しそうで——。

「なんで……」

でも、その顔は――。

「――シオン!?」

「ふっ!」とレオンが息を吐く。

仮面を失ったレオンは、カイムの銃剣を押し返して、大きく後ろに後退する。

そして邪魔そうに白い髪の毛を払う。

晒された可憐な顔立ちが、不愉快そうに歪む。

じゅうぜん

「まだ、十全にはやれないか。……折角のブーツもぐちやぐちやだ」

そう足元を確認した。ブーツの底がズタズタにえぐれ

ていた。

「どういことだ、お前は一体……まるで、死んだシオンに……」

カイクが呆然と緩慢^{かんまん}な動きでライフルを構えた。頭はパンク寸前。目つきが違う。髪の色が違う。声の高さが違う。言葉のアクセントも違う。だが鼻も、耳も、眉の形も——それに身長も、死んだシオンと同じだ。

「死んだシオン……？」カイクが自分の思考を反芻。

——死体は確認できていない。

——致死量。

——カイだって、本当は、信じたいだろ？

「……まゝ、まさか……シオンなのか？」

生きている。裏切られるのが怖くて想像しないようにしていた可能性を、カイムのその唇が紡ぐ^{つむ}。

レオンが嘲笑^{あざわら}った。

「私はレオン・ハルダートだ。シオンという少女は死んだよ」

そう宣言すると白い制服の背にあるホルスターにクラウソラスを収める。

「決着はまたにしよう、少年。君のことは覚えておく」
アメジストの瞳を嬉しそうに細めてレオンが言う。

「待て!!」

レオンを取り押さえようと、カイムがライフルを投げ捨てて駆け寄る。だが1歩早くレオンが飛び跳ねた。カイムの腕が無常にも空を切る。

レオンはそのままの勢いで上昇。3階建ての建物の屋根に一息で上る。一度カイムの姿を確認すると、また跳ねて、カイムの視界から消えた。

「逃がすかよ！」

カイムも屋根の上に跳ぼうと一歩踏み出す。すると――。

《街中に残党軍が侵入している！ 宿も襲撃された！戻ってエリ―ゼ姫を確保しろ！》

無線からノーブル大尉の怒鳴り声が響いた。

《カイ、全然、冷静じゃないじゃんかよ、僕の援護も待たずに!!》

続いてセエレの抗議。

カイムは舌打ちする。うるさい、邪魔をするな、知ったことか、あらゆる拒絶の言葉が口を飛び出そうとしていた。

《ああカイ！ ミーナはまだ生きてるよ！ でもひどい怪我だ！ どうしよう、カイ！ どうしたら!》

セエレの焦る声が聞こえた。セエレが右往左往うおうさおうしている姿が、カイムには容易に想像できる。

カイムは、ミーナを——また“家族”を失うことを想像した。それは避けたい予想図だ。

唇を強く噛みしめ、レオンの立ち去った方角を睨みつける……。

《了解……すぐに、向かう》

震える声で言った。



通りで仰向けに倒れているミーナ。目を閉じ。地面に染み込んでいくように大量の血液が流れていた。側に膝立ちのセエレ。カイムは駆け寄り、ミーナの脈を確認。弱い。だが確かにある。

ミーナの血のついた頬を何度も叩く。



「ミーナ、返事をしろ！ ミーナ！」

カイムの声に反応して、ミーナが弱々しく目を開ける。
青白い唇が揺れた。

「ごめん……カイ……負けちゃった……」

「……ああ、そんなこと気にするな、ミーナ」

少しだけ安堵あんどの表情を浮かべたカイムの側に、セエレ
が寄る。

「……カイ、あいつは？ 〈勇者殺し〉は？」

セエレはミーナに訊かれないような小さな声で耳打ち
した。

その言葉にカイムが、一度背筋をブルッと震わした。
セエレに顔を半分だけ向ける。

「……いや……逃した……」

そう告げるカイムに対してセイレは、それ以上は何も言わなかった。ただミーナを倒した強敵の状況を確認したかっただけだ。それ以上訊くのはカイムに悪いと思っただ。〈勇者殺し〉への復讐より自分たち"家族"の命を優先してくれたカイムに対して。

だが、カイムの頭の中は真っ白に染まる。

——間違いないシオンだ。——いやシオンなのか？
膝が震えた。

シオンがミーナを斬るか？　ありえない。姉妹みたい
に仲が良かったのに。

レオンと名乗っていた。伝承の勇者。神器を使う。確かにクラウソラスを操っていた。

シオンはクラウソラスを輸送していた。

クラウソラスとシオンは見つからなかった。

シオンなのか？ シオンが――。

セエレに言うか？ 言っているのか？

ミーナを見る。ありえない、そうありえないだろ。ミーナを――。

思考がぐるぐると同じところを回る。

「ゴホッ！」

ミーナが咳き込んだ。カイムは、はっとなって思考を

中断する。

ミーナの状況は予断を許す状況ではない。傷口を急いで確認する。

「さすがミーナだ。斬られる瞬間に体を捻^{ひね}ったな。傷は内臓までは達してない」

カイムが称賛する。ミーナの咳にも血は混じっていない。肺も無事と判断。

「……うん」

もつと褒めて。ミーナは左手を持ち上げて、カイムに向ける。その手をカイムは握り返す。

「死ぬ前に……ちゅ、ちゅーして……！」

ミーナは唇を尖らせる。

「だが、出血がひどい。セエレ、ヘアダマンアダプトを使って縫い合わせる」

「うん、分かったよ、カイ。やってみる！」

真剣な表情でセエレがうなずく。オラクルで極細のワイヤーとクリップを作って、傷を縫合する処置をカイムに指示された。セエレが、味方の兵士に何度かやったことがある手当だ。そのための応急手当の訓練も受けている。できるはずさ。不安を感じる自分を鼓舞。

「鉛は使うな、中毒になる。ウーツ鋼こうのナイフを使え」
「うん、自信はないけど……訓練どおりにやってみせるよ」

セエレは腰のナイフを取り出し、刃に指を当てた。血

が垂れ、ナイフがぐにやりと極細のワイヤーに変化する。ナイフの表面だった金属は使わない。空気に触れてない"奥"の金属を使う。菌に感染するリスクを下げするためだ。

「セエ……レ……セ……エ……」

ミーナが右手でセエレの軍用ジャンパーをつまんで、引っ張る。

「な、なに？」

「あとを残したら……クロス！ ブツクロス！」

わたしのキレイな体に縫合のあとを残すなよ。死にかけの状態でミーナはセエレを睨む。

「プ、プレッシャーをかけないでえ」

ただでさえ幼馴染おさななじみとして心配なのに、なんで心配している相手に脅されないといけないんだ。理不尽りふじんだ、この子。セエレは泣きそうになる。

セエレがミーナの手当を始めると、605部隊の仲間の1人が宿屋から出てきた。30代の無精髭ぶしょうひげを生やした兵士。カイムが見知った相手だった。

「状況は？」カイムが無精髭の兵士に尋ねる。

「急に敵が撤退しちまった。エリーゼ姫はまんまと奪われた。敵の中に体格の良い背広の男が見えたんだが、倒した敵の中に死体はねえ、遠くでエンジンの音も聞こえたから、足があるな……くそっ、こちらにも被害が多い」

無精髭の兵士は忌々しく吐き捨てた。いまいま

無精髭の兵士の背後。宿屋の1階の食堂では、負傷して仲間に支えられて立つ兵士や、兵士に背中を擦られながら泣きじゃくるモナの姿があつた。

カイムは無線でノーブル大尉に指示を求めると、ノーブル大尉がすぐに応えた。

《状況は最悪だな。〈勇者殺し〉が本当に現れ、レオン・ハルダートの名乗りミーナを打ち負かした。それで帝国への反撃の狼煙のろしが上がったと、街中では市民が暴動を起こしている。エリーゼ姫を奪還次第、我々はミースから立ち去るぞ》

《ノーブル大尉。ミーナの回収をお願いします。俺は銃

剣を交換次第、すぐにエリーゼ姫を追います」

《銃剣？》

《はい。折られました》

《ふむ、お前の刃を折るやつがいるとはな。……分かった、とにかくエリーゼ姫の奪還に先行してくれ。こちら
も準備ができ次第、すぐに援護に向かう》

通信が終わる。

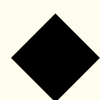
「俺たちはノーブル大尉と合流する。頼んだぞ。勇者」
無精髭の兵士がカイムの肩を叩いた。

「任せてくれ」カイムが応える。

「エリーゼ姫が連れて行かれる先に、あのへ勇者殺し
がいるはずだ」

カイムはそう確信していた。

「……シオン」無意識につぶやいた。



「貴方たちはアスガルズの工作員なのですか？」

エリーゼが問う。エリーゼは、ミースから脱出しようとするトラックの、幌^{ほろ}を張った荷台の奥に座らされていた。

「あれ、アン隊員、アスガルズの名前を出しちや駄目じゃない！」

「言っただの先輩ですよ！ わたしのせいにしないでくだ

さい」

そうだっけ。ヘクターが蜂蜜色の髪を搔^かく。

「エージエントなのですね？」

「はい……と答えるバカはいませんよ、姫さま」
ヘクターはぽんぽんとエリーゼの頭を撫でた。ヘクターの舐めた態度にエリーゼが睨む。

「ハルダートは休戦をします」

「とても不利な条件ですよ、エリーゼ姫さま」

「たしかにそうです。ベルカにアダマントの鉱山を奪われ、ベルカ軍のハルダートへの駐留を許します。ですが、それが、ベルカのアスガルズ侵攻の下準備だということにはなりません。」

あるか分からないアスガルズへのベルカ侵攻の氣勢きせいを削ぐことを目的に、ハルダートで武器をばら撒き、残党軍にゲリラ戦をさせようだななんてことはやめてください。それよりもベルカとアスガルズ。両国の関係をよくすることに尽力した方が、よっぽど価値のあることだとは思いませんか！」

「思いませんね」

ヘクターがきっぱり否定する。

「現状。大陸の大地が枯れてきているのはもちろん知っていますね？ 水も、土も、草も原因も分かんず汚染されている。どの国も食糧の生産量は年々下がっていく一方……いまは良くても20年以内には食料を奪い合うとい

う最も原始的な理由で戦争が始まりますよ。腹を空かせた囚人を同じ独房に入れて、パンを1つ渡すんですよ？

どうなるか想像つくでしょお？」

ヘクターの言葉に、エリーゼが口ごもる。反論するきっかけを頭の中から探す。だが、さきに口を開いたのはヘクターだった。

「あとで殺し合うのが分かっているのに、いま仲良くしたら辛いだけでしよう？ それとも中の良い兄弟で殺し合う悲劇が見たいのですか？ 姫さまは残酷だなあ」

ヘクターは愉快そうに鼻を鳴らす。エリーゼは言い返せず、悔しくて小さく唸った。

その瞬間——ダン、ダン、と銃声が響いた。

同時に幌の外で、激しいブレーキ音と、何かがぶつかり合う衝撃音が響く。

エリーゼは恐怖を感じて身を強張^{こわば}らせる。

「来ました！」

トラックの幌から外を監視していた兵士が叫ぶ。3両並んで走っていたトラックの最後尾の車両が、タイヤに銃撃を受けて、蛇^{だこ}行して、壁に激しく衝突して停まった。「これはボクもビックリだなあ、いきなり撃つてくるとは……」

先頭のトラックにいるヘクターが、幌の中から外を覗き見て、困ったように頭を搔く。

「先輩みたいにクソ強引な奴みたいですね」

アンも幌から頭を出す。

「彼、あんまり情報のない子なんだよね。弱ったなあ」
2人の視線の先には、トラックに追いつこうと、建物の屋根から屋根に飛び跳ねるカイムの姿が見えた。

「エリーゼ姫は、先頭の車両だな……西の鉄橋から脱出する気か！」

青い屋根を蹴り、空中でカイムが状況を判断する。

市街地を疾走するトラックの幌には牛のマークが描かれていて、一見すると牧場のミルクを運んでいる業者にしか見えない。だが一瞬だけ、先頭車両の幌の奥にエリーゼの姿が見えた。仲間の言っていた背広の男も確認する。

——くっ、〈勇者殺し〉はいないのか!?

2両のトラックが、大通りをフルスピードで駆け抜け、勇弓川にかかる鉄橋に向かっていた。

幌の中でヘクターが張り切るように大きな声を上げる。
「はい、みなさんが憎んでいる帝国の勇者が来てますよ
お、迎撃！　迎撃！」

ヘクターの指示に呼応した兵士たちは一斉に銃を構えて、幌の中から銃撃をする。

カイムは火線を避けながら、銃剣を交換したライフルを宙で構え——ちゅうちゅ躊躇する。

「コレではエリ—ゼ姫に当たる！」

さしもののカイムでも空中を飛び跳ねながら精確な射撃

をする自信はなかった。エリーゼを殺しかねない。リス
キーだ。

「直接、乗り込むしかない！」

——そしてエリーゼ姫を確保し、敵の指揮官からへ勇
者殺し〳〵の情報をつかせる!!

カイムが決断。街の街灯、柱、植木を踏み台に加速。
なんとかトラックに追いつこうとする。

「撃て！ 撃ち殺せ！」

2両目の車両がヘクターたちの1両目の車両をカバ
ーするように、カイムと1両目の車両の間に入る。

兵士たちが迎撃を開始しながら、追いつがろうと縦横
無^む尽^{じん}に飛び跳ねるカイムに舌を巻く。

「は、速すぎる、人間の動きじゃないぞ!!」「くそ、当たれよ!!」

カイムは2両目の車両からの銃撃を何度も躲したが、やがて着地のタイミングを失い、地面を転がる。だが、跳ね起きて即座に反撃。荷台から上半身を乗り出す敵兵の眉間を精確に撃ち抜く。そして前に跳ぶ。反り立つ街灯の、灯具とうぐの上を踏み込む。

「ちっ、化物め」

撃ち抜かれた兵士の横で、残党軍の分隊長が吐き捨てる。

——やはりアイツらは人間なんかじゃない。足で車の速度に追いつがる。銃弾が見えているみたいに避ける。

一瞬の間があれば狙撃するみたいに精確にこちらを狙ってくる。ならば、

「準備できました！」

「遅いぞ、早く持ってこい！」

分隊長が部下を叱責。次いで幌の中から雄々しい姿が飛び出した。

環状に並ぶ多銃身たじゅうしんの機関銃きかんじゅう——ガトリングガン。銃身が光を反射して鈍い色に輝きながら、回転を始める。

キイイイイン。

「はっはっはっ!! 異名もないような腐れ勇者め、この俺がお前を地獄に落としてやるぜ!! 異名もないとはい

え勇者は勇者!! これで俺もはれて大陸の禁忌^{きんき}中の禁忌であるへ勇者殺し〜になれるってわけだ!!」

ガトリングガンのトリガーに指をかけた分隊長。舌なめずりをする。

トラックは鉄橋に到達した。視界も良好、勇者の踏み台になるものは街灯と欄干^{らんかん}しかない、絶好の機会だ。

「っ——!」

殺意に反応してカイムが大きく跳ねる。ガトリングガンの掃射^{そうしゃ}は津波^{つなみ}のような銃撃の暴力だ。命中すれば身元も判別できない肉塊と化すだろう。

ガトリングガンの銃口が冷徹にカイムに向けられる。同時に無線に反応。

《カイク、エリーゼ姫は先頭の車両だな!!》

《はい、先頭の車両です、ノーブル大尉!!》

すると、カイクの後方からドンツと空気を揺るがす音が響いた。風を切る音。

次の瞬間。2両目のトラックの側面に飛翔体が衝突。トラックが玩具のように吹き飛び、車体がバラバラに引き裂かれながら、川へと落ちていった。

《感謝しますノーブル大尉!》

《早く追え、カイク! エリーゼ姫の車両を戦車砲で吹き飛ばすことはできん!》

「ひよっとして、あの威力はオーガキラーかな? 小さ

めの戦車なのに、わりと大きい戦車砲に、砲を換装かんそうして
いるんだねえ、あはっ！」

味方のトラックが敵戦車に破壊されたのにも構わず、
ヘクターが楽しそうに言う。

ノーブル大尉の指揮する軽戦車リンデからの砲撃だっ
た。ノーブル大尉は橋を全貌することができる広場にリ
ンデを停止。敵を直接追わずに、精密な砲撃をすること
を選んだのだ。

橋には傷一つつかず、トラックだけが破壊された。

リンデは戦車長が砲手も担当する。この砲撃の腕はノ
ーブル大尉によるものだった。

「まあとにかく、守ってくれる味方もいなくなっただし、

ここが正念場だね。ボクも張り切っちゃおうよお！」
街灯を飛び跳ね迫ってくるカィムを視界に捉えへク
タ——が笑う。

この人間離れした敵と直接交戦する。
恐ろしい相手に、鼓動が高鳴った。ライフルのボルト
を引く。

アンも立ち上がりライフルで立射りっしゃの体勢を維持。

「街灯を飛び石みたいに使って、走るトラックを追走で
きるなんて……」

「リラックスしてよ、アン隊員!! はい、深呼吸！

……じゃあいつくよお！」

「ツ——はい!!」

ヘクターとアン。同時にライフルを連射する。

ダン、ダン、ダン、ダン、ダン——!!。

「おや、まったく当たらないな……」

ヘクターが苦笑い。

ヘクターとアンは、左右に飛び跳ねながら迫るカイムを狙い撃つ。だが、どれもすんでのところで虚しく^{むな}躲される。ヘクターはカイムがあと一息でトラックに取り付くのは分かっていた。

「焦っちゃダメだよ、こういう時が一番のチャンスなんだ——これは、どうだ!」

ヘクターが街灯の支柱を狙撃する。カイムの動きを読^{もろ}んでの行動だった。支柱に穴が開く。脆^{もろ}くなつた街灯に

カイクが着地。支柱が折れ、次に跳ねようとした力が分散され、バランスを崩す。

「当たれ!!」

アンが叫んだ。アンの渾身の一撃がカイクの肩口を掠める。

「ッ！」カイクがバランスを崩さないように空中で回転する。

「美味^{おい}しいところは、ボクがいただいちゃうよ！」

そこにヘクターがニヤリと照準を定める。

ヘクターは照準器を通して、カイクの姿を見つめる。

過剰に分泌されたアドレナリンが、その光景をスローモーションに見せた。

カイムがよどみなく手榴弾しゅりゆうだんを取り出した。器用に片手でプルリングを引き抜き、捨てた。ヘクターにはカイムの行動の意味が分からなかった。

「手榴弾？ エリーゼちゃん、ここにいるよお？」
するとカイムはエリーゼに構わず、ヘクターたちのもとへ手榴弾を振りかぶって投げた。
荷台の中に手榴弾が1度跳ね、内壁にぶつかり、転がる。

「うつそだろおおお！」

カイムの予想外の行動に、ヘクターたちは反射的に伏せた。

……問が開く。手榴弾から爆音が響かない。

「あれ？」ヘクターが伏せた顔を上げた。

ヘクターは恐る恐るカイムの投げた手榴弾を確認してみる。舌打ち。手榴弾のセーフティレバーが外れていなかった、抜けば手榴弾を炸裂さくれつさせる安全ピン。その先端についていたプルリングは確かになくなっていたが、安全ピン自体は抜けきっていない。

カイムがその握力で、安全ピンの先端だけを捻ねじり切つて、プルリングを捨ててみせたのだった。それも片手で。「そんな出鱈目でたらめなあ！」

ヘクターが嘆なげくと同時に、カイムが幌の中へと飛び込んできた。

兵士たちが即応そくおうする。銃を構え、銃剣を突き出し、力

イムを殺そうと動く。

「このっ！」「勇者だからって!!」「ここで終わりだ！」
だが、すぐにカイムの拳やストックで殴り倒され、左手で抜いた拳銃で撃ち抜かれた。

カイムは、エリーゼを確認しつつ、倒れた兵士を尻目に、残るヘクターとアンを睨む。

「お前が指揮官か？ ならば〈勇者殺し〉をすぐに呼べ。
でなければ――」

ヘクターの額^{ひたい}にライフルをピタリと向けた。
「終わりだ」

殺気に当てられたヘクターが冷や汗を流すが、その目は愉快そうに細まる。

「あはっ！　　どうだろう、カーテンコールにはまだ早くない？」

ヘクターのキザな顔が歪む。お楽しみはこれからだ。そう、幌の壁にあるロープを掴む。そして拳銃を撃った。――トラックの運転手に向けて。

後頭部を撃ち抜かれた運転手は即死。上半身がハンドルに向かって倒れ、トラックはコントロールを失い、右へ左へと蛇行する。

「きゃあああ！」エリ―ゼはバランスを失い悲鳴を上げた。ヘクターは口角を上げ、ロープに掴まりながら踏ん張る。

カイクに倒された兵士たちの体が、人形みたいに無造

作に荷台から投げ出され、鉄橋の上に転がっていった。

トラックは暴走しながら、鉄橋の柱にぶつかって停止する。激しい衝撃が荷台の人間たちを揺さぶった。トラックは道路に対して横に停まっている。後輪が欄干を押し倒して、橋から飛び出ていた。

「くっ……」

カイムは幌の端に片手で掴まり、振り落とされまいと耐えきってみせた。その背後には川の流れが見えている。

「ホラよ、勇者さま！」

瞬間、カイムの側を、ヘクターに突き飛ばされるように投げられたエリーゼが横切った。

「な——！」

想像もしなかった状況にカイクが絶句^{ぜっく}する。

トラックは道路に対して真横に停まっているのだ。つまりエリーゼの投げ飛ばされた先には何もない。下に勇弓川が流れているだけだ。

「はは、どうする、どうする？」

「クソッ！」

カイクが咄嗟に判断。荷台から飛ぶ。空中に放り投げられたエリーゼに手を伸ばす。

「勇者殺し」はエリーゼのもとに現れた。エリーゼは「勇者殺し」を捜す手がかりになる、そう考えての行動

——だが、背後から殺気を感じ、すぐに失態に気づく。

「勇者さま、ボクにも「勇者殺し」をさせておくれよ！」

ヘクターが拳銃を構え、宙でエリ―ゼの体に重なるカ
イムに狙いをつける。

「くっ、エリ―ゼごと撃つ気か!？」

バン、バン！

乾いた発砲音。連続した。

カイムの体に、衝撃。ヘクターの銃弾によって背骨と、
肺^{はい}の裏を貫かれる。

呻く。肺の中に血が満たされる。脊椎^{せきつい}を損傷して体の
感覚がなくなる。

その意識の最後に、また会いたかった銀髪の少女が目
に浮かぶ。

「……シオ……ン」

あまりのことに思考が停止したエリゼ。その顔に、瞳の光を失ったカイムの顔が迫る。

——死んだ？ あの人死んだの？

地面に足がつかない。投げ出されたことによる無重力感。

すぐに自由落下。

上へ、上へと流れる景色がスローモーションに見える。下へ、下へと意識が沈んでいく。

——かあさま、かあさま。

心のなかで呟いた。

《カ
イ
イ
イ
ー
!!
》

援護に向かおうと鉄橋を駆けつけたセエレが絶叫した。

G A 文庫 7 月刊『帝国の勇者 世界より少女を守りたい、と“まがいもの”は叫んだ』の試読版はここまで。
このあとの続きは、本編でぜひぜひお楽しみください！